



JIC インフォメーション

第 234 号 2025 年 4 月 10 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋

《講演録》 大阪日口協会講演会

「ウクライナ戦争、停戦和平は可能か」……東郷 和彦……2 P

《講演録》 映画評論家アントン・ドーリン氏講演会

「逃走と沈黙」～ロシア映画と戦争……11 P

《投稿》 カザフスタン留学体験記

何気ない一場面が宝物のように見える……冬木 里佳……19 P

《投稿》 ロシア語劇団コンツェルト

学生演劇×ロシア語劇団で 55 年目……平原 真宏……21 P

《報告》 JIC ロシア語サロン……中林 英子……23 P

《日口交流情報》 ロシア語映画発掘上映会ほか……25 P

《連載》 こんな時代にロシア語のすすめ

「こんなところでドイツ語のすすめ」……黒田 龍之助……27 P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会) 会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

3 月 15 日、大阪日ロ協会の定期総会が大阪市内の会議室で開催され、「ウクライナ戦争、停戦・和平は可能か？」と題して、国際政治学者の東郷和彦氏（元外務省欧亜局長、元京都産業大学教授）の講演会がオンライン併用で行われました。講演では、今年に入ってから急速に動き始めた「トランプ停戦交渉」の現況とその行方、またこの戦争の背景などが、詳しく解説されました。交渉はその後も続いており、アメリカが露ウ両国に「30 日の全面停戦」を提案してから、その具体的なプロセスとして、エネルギー施設への攻撃停止や黒海での船舶安全運航など、協議と交渉が進んでいます。一日も早い停戦の実現を祈らずにはおれません。なお、停戦交渉をめぐる動きについては、Web マガジン『魚の目』（魚住昭氏責任編集）に連載中の「東郷和彦の世界の見方～ウクライナ和平の動向」で、この 1 月以降の経過が丹念に分析されており、大変参考になります。併せてお読みください。→ <https://uonome.jp/>（編集部）

講演録

大阪日ロ協会 講演会（3月15日）

「ウクライナ戦争、停戦・和平は可能か」

東郷 和彦（元外務省欧亜局長、元京都産業大学教授）

アメリカでトランプ大統領が再登場してから、世界中が激しく動き始めました。ウクライナ情勢がどうなっているか、率直なお話をさせていただきたいと思います。

トランプ登場の意義

まず、トランプ再登場の意義ですが、バイデン時代の 4 年間は一言で言えば、「ウクライナに侵攻したロシア・プーチンは悪、これに対して英雄的に戦うウクライナ・支援するアメリカ NATO 西側は善」、こういう構図でやってきたわけです。ここでトランプ大統領が当選し、「ウクライナの戦争を終わらせる」と言った。私の意見では、トランプが「戦争を終わらせる、これが第一の目的だ」と言ったことは、まさに革命的な転換だと思います。

戦争終結が第一ということになると、ロシアとウクライナに戦争を止めさせるためには、アメリカは中立的な調停者として両国を調停する立場に立たざるを得ません。事実、アメリカはそういう政策を取った。自分が責任を持って戦争を止めさせるという立場に立ったときには、一方の当事者が善で他方の当事者が悪だと言っているのは、調停できません。悪とされた方は最後まで戦う。そうではなくて、とにかく今すぐ止めるために、アメリカは両者の間に立って調停をすることにしました。その時からすでに 50 日が経ちました。この 50 日間に大きな変化が起きているのは間違いありません。「戦争を終わらせるのが第一」という目標を持ったトランプ政権が出てきて、私は本当にいい変化が起きてきたと思います。

私はウクライナ戦争が始まった半年後の 2022 年 10 月に「プーチン VS バイデン」（K&K プレス）という本を出しまし



3 月 15 日、大阪市内の会議室にて

た。そこにも書いたのですが、「外交によって合意形成ができれば、この戦争はどちらか一方が倒れるまで続くだろう。その間に多くの無辜の民が命を落とすはずだ。それだけは絶対に避けねばならない」（同書 20 頁）。これが、この戦争に対する私の信念であって、まさにこの信念を実現するように、「戦争終結が第一」というトランプ政権が出てきたことを、非常に力強く感じていますし、是非この作業を成功させてほしいと思います。

しかし、戦争を止めさせるためには、やっぱりその条件を整えなければなりません。それは当然ウクライナが納得する条件を満たす必要があるし、同時にロシアが主張する最低必要条件も満たす必要があります。ロシア側にも最低条件があることを必ずしも多くの人が理解しているわけではありませんが、やはりこれはあるんですね。それぞれが求める条件をよく理解して、双方を公正・公平に均衡して、調停を進めることができるかどうか、ここに今回の「トランプ停戦交渉」のすべてのカギがあると思います。

戦争をやめる条件

では、ウクライナとロシア、それぞれの最低条件は何か。

ロシアにとっての絶対条件は安全保障です。昨年 11 月 7 日にロシアで「バルダイ会議」が開催されました。毎年秋に黒海に面した保養地ソチで開かれるバルダイ会議では、ロシアと世界の有識者を集めてその年の国際情勢を話し合う。その最終日にはプーチン大統領が出席して総括的意見を述べ、その後あらゆる種類の質問を受けて質疑応答するのが恒例となっています。昨年は 11 月 7 日に、満を持してこの会議が設定されました。満を持してというのは、言うまでもなく、11 月 5 日にアメリカ大統領選挙の結果が決まるからです。カマラ・ハリスが勝つか、トランプが勝つか、11 月 7 日には結果が出ている。そこでプーチン大統領は、おそらく考えに考え抜いて、米新政権に対してロシアが何を一番求めているのかということを、明確に表明しました。プーチンはまず、西側の反ロシア政策をこっぴどく批判しました。「NATO の東方拡大で、その反口政策が明確になった。彼らはそうしないと約束しているのに、それをやり続けた。」「われわれを貶め、わが祖国を内部または外部から破壊しようとしている。」

NATO 東方拡大ですが、ここでプーチンが一番問題にしているのは、ウクライナが NATO 入りする東方拡大ですね。それだけは絶対にダメだと、最初にはっきりと言いました。

議論の最中にちょっと面白いことが起きました。総司会者のヒョードル・ルキヤノフが、最初のスピーチが終わった後に発言して、「あなたはウクライナの中立化が実現したら、その後に国境線の話、つまり領土の線引きの話をするんですか？」と質問した。そうしたら、プーチンは直接それに答えなかった。再び「中立化なしに両国間に良い関係はありえない」と言って、国境線には言及しなかったのです。これがプーチンの今後の対応の一つのヒントになるのではないかと、BBC（英国営放送）のモスクワ特派員を長年務めたレオニード・ロゴージンという人が指摘しています。つまり、ロゴージン氏はプーチン大統領が国境線の質問をかわしたことから、今後はこれも交渉の対象になりうると読み取ったのです。私も同感です。

ウクライナ側の条件はどうかと言うと、ウクライナも安全保障は絶対条件です。11 月 29 日、イギリスのスカイニュースにゼレンスキー大統領のインタビューが出ました。「現在ウクライナの統治下にある領域が NATO 加盟のために招待されること、これと引き換えに、2022 年の住民投票によってロシアに併合された地域はすぐに取り返さなくてもよい。ただし、西側はウクライナの領有権主張を認めてほしい」。

それまでのゼレンスキーの基本主張は、「併合された領土を全部取り返すまで戦争を続ける。1991 年の国境線までロシアを撃退するまで戦う」という強硬なものだったので、やはりトランプの登場で、それまでに比べて柔軟で現実的な言い

方をし始めました。

トランプ調停、その迅速な動き

そこでいよいよ 1 月 20 日、トランプ大統領の就任式が行われ、ウクライナ停戦の動きが具体的に始まりました。その最初の結果が出てきたのは 2 月 12 日。トランプ大統領が SNS にプーチン大統領と長時間の協議をしたと、非常に印象的な発信をしました。「私は先ほどロシアのプーチン大統領と非常に生産的な電話協議を終えた。私たちは戦争で発生している数百万人の死者を食い止めたいとの認識で一致した」、その結果「両国のチームがすぐに交渉を開始することで合意した」。

ということで、2 月 18 日にサウジアラビアの首都リヤドで、米露の高官協議が行われました。ロシア側はラブロフ外相、ウシャコフ大統領補佐官、アメリカ側からはルビオ国務長官、ウォルツ大統領補佐官（安全保障担当）、それにウィットコフ中東担当特使が参加しました。ウィットコフは中東担当なのですが、なぜ彼が出てきたのか。いろいろな情報を総合すると、ウィットコフはトランプと長い間の友人で、いわゆるディール外交の真髓が一番よく分かっている人だということで、重要な交渉には彼が全部出てくるようです。

この最初の米露高官会議で何が決まったかと言うと、アメリカとロシアの全面対話再開の手順を決めた。簡単に言えばこれだけなんです。これだけなんです、やっぱり大変なことだと私は思うのです。なぜかと言うと、バイデン時代の 4 年間、アメリカとロシアは真面目な対話をしたことが一度もない。「プーチンは絶対悪だ」という立場ですから、バイデンはプーチンと話す必要はないということで 4 年間きちんとした対応をしなかった。事務的な接触がなかったわけではありませんが、とにかく対話がなかったの、まずは対話を再開する。その対話の中からお互いに合理的に対応できる相手かどうかを確認していく。こういうアプローチをとったわけです。このアプローチは、私のこれまでの外交経験に照らしても本当に正しい。まずは接触することによって、対話と信頼を積み重ねることが大事です。

協議では、関係正常化のための次官レベル協議や、エネルギー・経済、宇宙などの協力再開の対話を開始することが確認されました。ラブロフ外相がウクライナ問題解決のためには「紛争の根本原因（root causes）を除去する必要がある」と、ロシアの基本的立場を強調しましたが、これは最初の対応としては当然のことだと思います。

トランプ・ゼレンスキーの激突（2 月 18 日）

米ロ協議が順調に進み始めたところで、ゼレンスキーとトランプの激突が起きました。このところニュースで持ち切りだったのでご記憶でしょうが、最初の激突は 2 月 18 日です。リヤドでの米ロ協議の結果を受けて、フロリダ州のマール・ア・ラーゴの別荘で行った記者会見で、トランプ大統領がゼ

レンスキー大統領に激しい怒りを爆発させました。

実は、トランプ大統領がロシアと交渉を始めてから、ゼレンスキーは「ウクライナの問題を議論しているのにどうしてウクライナを入れないんだ」「自分が参加しない交渉は一切認めない」と、ことあるごとに言っていた。このゼレンスキー発言に、トランプはどうも切れてしまったようです。

「ゼレンスキーは、この3年間ウクライナの大統領として戦争を早期に収束させ、何百万の人を死なせずにすんだのに、一度もロシアと対話していない」。確かにゼレンスキーは、22年10月に「プーチン政権との交渉を禁止する法律」を作っています。自分で交渉を禁じて、戦争を止める努力をしていないのに、アメリカがそれに代わってロシアと交渉することにケチをつけるとは何だ、というわけです。

トランプは口で言うだけでは自分の怒りが正確に残らないと思ったのか、翌日のSNSでもゼレンスキーを激しく非難します。「ゼレンスキーは喜劇役者であり、勝つ見込みがなく、始める必要がなかった戦争を始めた」「彼は、選挙を行うことを拒否し、正当な資格を失っている独裁者だ。早く動かなければ国を失う」。

懸念する欧州（英・仏）

この激突を心配したのがヨーロッパの首脳、特にフランスのマクロン大統領とイギリスのスターマー首相です。ゼレンスキーとも相談して、レアアースの資源開発をてこにトランプとゼレンスキーの仲を取り持つ策を立てました。ウクライナにはハイテク製品の生産に欠かせないレアアース（稀土類）がたくさん埋蔵されている。これは昨年秋にウクライナが提案した「勝利計画」の中に、資源開発の協力を盛り込んでいたもので、レアアースの開発権と引き換えにウクライナの安全保障をアメリカに求めるものでした。

ただ、アメリカはウクライナの安全保障とは切り離し、商業ベースでのレアアース開発協力を主張していて、契約できてなかったのですが、契約が実現してアメリカ企業がウクライナにたくさん進出すれば、ロシアも攻撃を抑えるので、それが安全保障につながるという論理でウクライナを説得していた。このアメリカの理屈を英仏はゼレンスキーに吞ませて、トランプとの和解を図ろうとしたわけです。

2月24日にマクロンが訪米、次いで27日にスターマーが訪米してトランプと会談、最後が2月28日のゼレンスキー・トランプ首脳会談で、ここで仕上げをするという筋書きで、スターマーまでは大変うまく行ったんですね。

トランプ・ゼレンスキーの激突（2月28日）

ところが、2月28日のゼレンスキー・トランプ会談で、誰も予想しなかった大爆発が起きてしまった。私はこの大爆発の経緯を繰り返し分析したのですが、会談冒頭のトランプの発言は非常に良くできていて、温かい言葉で歓迎し、このあ

とレアアースの資源協定に署名をして、対話を深めようという内容で、米大統領として初めてゼレンスキーを迎えて言うにふさわしい言葉でした。ところがだんだんと雰囲気がおかしくなっていた。

やり取りを聞いていて、どこでおかしくなっていたのかというと、トランプはとにかく戦争を止めることが第一で、だから「これから戦争を止めるにあたって…」と何度も言うのですが、その度にゼレンスキーが「戦争をプーチンに止めさせる」と言い替えるんですね。「プーチンに止めさせる」。これはトランプのアプローチには絶対ありえない。「プーチンとゼレンスキーの両方に戦争を止めさせる」中立的立場で調停をしようとしているわけですから。ゼレンスキーが「プーチンに止めさせる」と言うと、論理的にはトランプは「いや、プーチンだけではなくて君にも止めさせる」と言わざるを得ない。ということで、ゼレンスキーが発言する度に不機嫌になっていった。

外交交渉で停戦を実現しようとしている中で、実はその交渉で「自分の肩だけ持ってくれ」という発言が繰り返された結果、横で聞いていたバンス副大統領が、たまりかねて口をはさんだわけです。ゼレンスキーに対して、「私たちは外交で戦争を止めさせるということを第一に言っている。そのことが分からないんですか」と言ったら、今度はゼレンスキーが「プーチンのような残虐な男と外交交渉することにどんな意味があるのか」とバンスに切り返した。この言い方はないですね。このやり取りをホワイトハウスで記者たちの前でやったわけで、これにバンスが激怒して、それを見ていたトランプも切れてしまって、「あなたの発言はあなたの国民の命を救おうとしている我々に対し敬意がない」「あなたは戦争を終わらせる力もない」「あなたは第三次世界大戦を引き起こしかねない危険な政策を遂行している」という面罵に発展したわけです。ここで会談は完全に物別れになって、昼食会も協定署名もすべてキャンセルされてしまいました。

ゼレンスキーの帰国後、トランプはSNSに次のように書きました。「私はゼレンスキー大統領が、アメリカが参加する平和への準備ができていないと判断した。なぜなら、彼は我々の参加が交渉上大きな優位性を与えているからである。私は優位性を求めない。『平和』を求めている。彼は、平和への準備ができたら戻ってくることができる」。これが2月28日の経緯です。

この後の3月3日、アメリカはウクライナに対して恐ろしい政策を取りました。バイデン政権が積み重ねてきた軍事援助・武器供与を中止し、さらに厳しいのは、偵察機や衛星から得られる軍事機密情報の提供も止めてしまったのです。

トランプ施政方針演説（3月5日）

このような状況の中で、トランプ大統領の施政方針演説が3月5日に行われました。演説内容の大半は内政の話題で、

外交の話はほとんど出てこなかったのですが、この時にトランプは、「直前にゼレンスキーから書簡をもらった。『できるだけ早く交渉のテーブルに着く用意がある。トランプ氏の強力な指導力のもとで持続的な平和のために働く準備ができています』『資源協定についてはいつでも署名する用意がある』とゼレンスキーは言っている」と紹介しました。

一見して、ゼレンスキーはトランプが主導する和平に全面的に従うことにしたという印象を与えます。しかしゼレンスキーのメッセージをよく読むと、アメリカが求めている謝罪はしていない。それからすべてが意図表明。今すぐやるではなくて、やる用意があるという意図表明です。これ、外交でよく使うのですが、「やる用意があります」と言っても、いつそれをやるかははっきりしていない。さらに、一番重要な安全保障の根幹についての考えが表明されていないということで、アメリカが取った厳しい措置は施政方針演説後も撤回されないままでした。

ウクライナの対ロシア不信

どうしてこんなに話がこじれるのか。要するにウクライナ・欧州・アメリカの対ロシア不信が積み重なってきた。さらに日本ではほとんど理解されていないのですが、ロシア側にもウクライナ戦争が始まるはるか前から米欧 NATO の主要国とそれに支援されるウクライナに対する不信感が蓄積してきました。トランプとゼレンスキー、プーチンの個性のぶつかり合いという面もありますが、根本的にはこの二つの不信感を取り除かないと話がうまく進まないところに、今回の非常に困難な状況が生じていると思うのです。

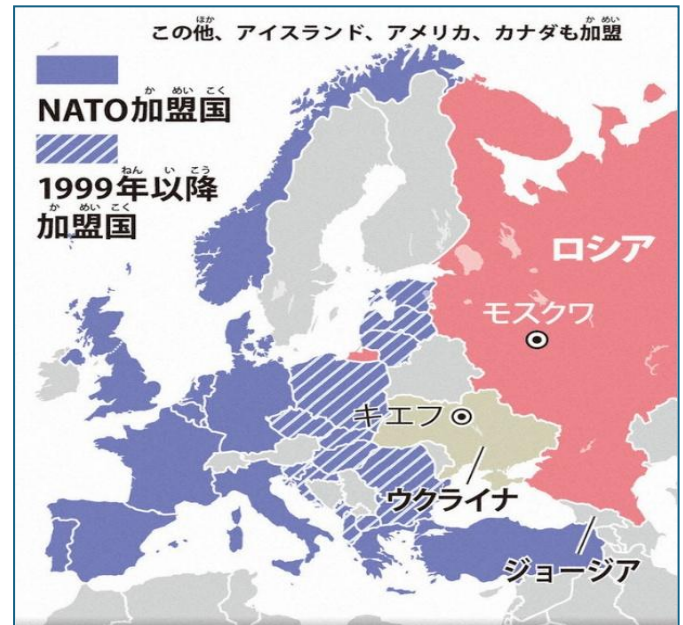
まずウクライナのロシアに対する不信感ですが、戦争の開始以来、大勢の人が殺傷されました。「プーチンは嘘つきで約束を守らない」、「プーチンはヒトラーに等しい」。これがこの 4 年間、ウクライナ人とヨーロッパ人の中の一部に蓄積してきた。曰く、「2014 年マイダン広場の虐殺はロシアの仕業だ」「2015 年ミンスク合意に違反したのはロシアだ」…。

しかし、もしプーチンがヒトラーと同じだったら、今行われている停戦交渉は無意味ですよ。それは私もそう思う。ヒトラーのような殺戮者で、あらゆる嘘をついて戦争を起こし、帝国を広げて世界を席卷するというのがプーチンだったら、つまりプーチン＝ヒトラーだったら、和平交渉なんて意味がないし、本当にそんなプーチンなら叩き潰さないといけないと思います。しかし、冷静に見ればプーチンはヒトラーと同じではない。やっぱりそれはこの 4 年間に西側の政治指導者たちの頭の中に叩き込まれてきた一つの思い込みだと思います。

ロシアの対ウクライナ・西側不信①～NATO 東方拡大

では、ロシアの対ウクライナ・西側不信はどこから来ているのか。

ロシアにとっての根本問題は二つあります。一つは NATO 東方拡大への不信です。



ゴルバチョフのペレストロイカの結果、東西ベルリンの壁が崩壊し、1990 年 2 月 9 日に東西ドイツの統一交渉が行われました。当時のコール西独首相、ベーカー米国務長官が、ゴルバチョフに対して、「東ドイツと西ドイツを統一させてほしい。スムーズに統一させてくれるのであれば、NATO は 1 インチも東側に拡大しない」と口頭約束した。これはいろんな説があるのですが、間違いのない事実です。

しかし、91 年にソ連邦が解体して、旧ソ連・東欧諸国が資本主義化し、90 年代に東欧諸国の NATO 加盟議論が進みます。1999 年 4 月にチェコ、ハンガリー、ポーランドの 3 か国が、2004 年 3 月にルーマニア、ブルガリア、バルト三国など 7 か国が NATO に加盟し、その後も東方拡大が続きました。ロシアは 1990 年代のエリツィン大統領の時も、2000 年に大統領になったプーチンも、NATO 東方拡大を認めていくのですが、ただその時にプーチンは、「ウクライナとグルジアだけは絶対ダメだ」と言っていた。ところが交渉の過程で、ウクライナの NATO への原則加盟が認められ、ロシア側からすれば「絶対に認められないレッドラインを超えた」ことになりました。これがロシアの非常な西側不信の第一原因です。

ロシアの対ウクライナ・西側不信②～ロシア系ウクライナ人の問題

もう一つは、ウクライナ内のロシア系ウクライナ人の言語・宗教などアイデンティティ保護の問題です。ウクライナという国は複雑な構造で、東部はロシア系ウクライナ人が多く住み、西部ガリツィア地方には全くロシア系でないウクライナ人が住んでいる。東部ドンバスの内戦は、マイダン革命後のウクライナ政府が「ロシア語の使用制限」を決定したことが一つの原因です。したがって、「ロシア系ウクライナ人の

言語や宗教を認め保護すること」「ウクライナへの NATO 拡大をしないこと」、この二つの条件を独立後のウクライナと西側欧米が守っていれば戦争にはならなかったのだと、プーチンは繰り返し言ってきました。

ロシアから見ると、まさにこの二つの条件をウクライナと米欧 NATO 諸国が破ったために、その論理必然的な結果として戦争になってしまった。ロシア側が言う「戦争の根本原因 (Root Causes)」というのは、突き詰めるとこの二点に集約されると私は思います。

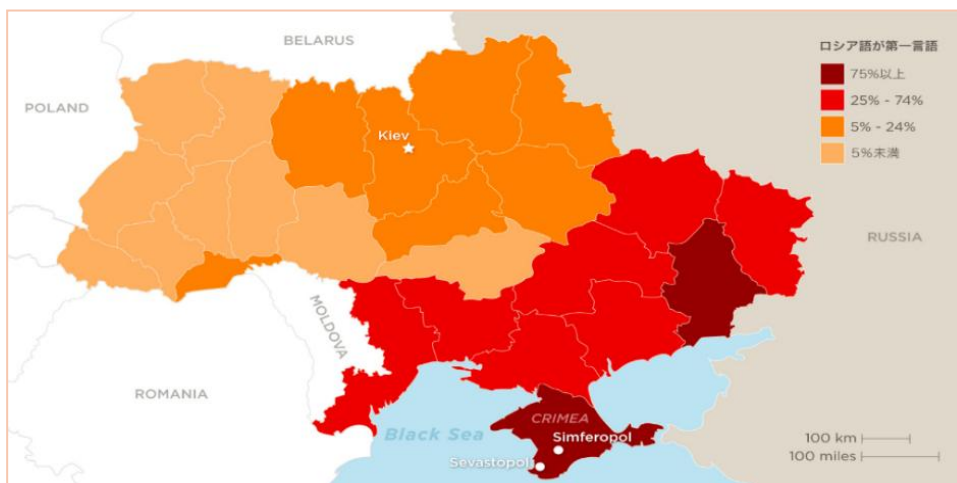
第一条件の崩壊

この二つの条件は、いつ、どうして崩れていったのか。

第一条件の崩壊、つまり NATO の東方拡大についていえば、決定的だったのは 2008 年ブカレストでの NATO 首脳会議です。ここでウクライナとグルジアの NATO 加盟問題が提起されました。議論をリードしたのはアメリカのジョージ・W・ブッシュ大統領です。ブッシュが主導力を取ってウクライナとグルジアの NATO への原則加盟を決定した。プーチン大統領は激怒して、その場で激しい批判演説を行いました。ここで第一条件が壊れたのです。

第二条件の背景

第二条件はもう少し複雑です。地図を見てください。ウクライナの中部と東部、赤の色が強い部分（国土の 5 分の 4）はロシア語話者が多く、宗教も東方正教会で、ロシアと親和的です。特に赤が濃いクリミアとドンバスでは、住民の 75%以上が「ロシア語が第一言語」です。これに対して、残りの 5



分の 1、西部のガリツィア地方はもともとポーランドを宗主国としており、宗教はカトリック、言語もウクライナ語のみで、東部との間に大きな分断がある。西部ガリツィア地方がソ連領（ウクライナ領）に組み込まれたのは第二次世界大戦終了後のことなのです。

なぜ第二次世界大戦後にソ連領になったのか。ここで本当の悲劇が起きたと思うのですが、1941 年 6 月にヒトラーが対ソ戦を開始し、ドイツ中央軍はモスクワ、北方軍はレニン

グラード、南方軍はウクライナ方面へと電撃的に攻め込んだ。ガリツィアにヒトラー軍が入ってきた時、ポーランドからの独立運動で収監されていたガリツィア・ウクライナの愛国者ステファン・バンデラが釈放され、彼はナチスの力を借りて独立を達成しようと、当面の敵であるソ連軍と戦うのです。バンデラ軍はソ連・赤軍と戦うと同時にナチスのユダヤ人虐殺にも手を貸します。しかし、ソ連軍は二千万人以上の膨大な犠牲を出しながらドイツ軍を撃退して、東欧諸国をナチス支配から解放しつつベルリンに到達し、勝利者になりました。バンデラ軍も敗北し、バンデラ自身はドイツに逃亡するのですが、捕まって処刑される。ガリツィアに残された民族主義派の人たちの多くは北米大陸とくにカナダへと逃げました。カナダには以来、ウクライナの生活様式やウクライナ語を守り続けるウクライナ移民の大きなコミュニティができました。

彼らは、いつか状況が変わってガリツィアに帰りたいと思っていたところ、1991 年にソ連邦が崩壊。夢に見たウクライナの独立が達成されて、ガリツィアにもどってきました。彼らガリツィア民族主義者の末裔たちは、赤軍との戦いに敗れてカナダに追い出されたわけですから、ポーランドや欧米と親和的であると同時に、最大の敵はロシアなんですね。とにかくロシアは大嫌い。ルソフォビア（ロシア恐怖症、ロシア嫌悪症）に染まった人々が、ガリツィアにもどって、中心都市のルボイ（ロシア語ではルボフ）を中心に、新しいウクライナ作りを開始した。この人たちは、プーチンにとっての第二条件、ロシア系ウクライナ人を大切にするに全く関心がない人たちです。

第二条件の崩壊

第二条件が崩壊したのは、端的に言って、2014 年 2 月のマイダン革命です。ソ連邦解体後のウクライナの政治は、親口的な東南部と親欧米の西部、その間に立つ首都キエフを中心とする中部のバランスの上で揺れ動いてきました。西部ガリツィア地方を支持基盤とする親欧米派のユシチェンコ大統領のあと、東部地域を地盤とする親口派のヤヌーコビッチ大統領が出てきて、ユシチェンコの親欧米的で EU との協力を拡大する経済政策を引き継ぎつつも、ロシアとの様々な経済協定を考慮して軌道修正を図ろうとしました。これに対して西部ガリツィアの血気盛んな親欧米派の青年たちが反発して、2013 年末から首都キエフの中心部にあるマイダン広場で大規模な抗議行動を始めた。その結果、2014 年 2 月にいわゆる「マイダン革命」が起こったわけです。

その時に、ヤヌーコビッチを追い出せと、裏から強力な指示を出して援助していたのが米国務次官のビクトリア・ヌー

ランドというネオコンです。ヌーランドの上で指揮を取っていたのは当時副大統領だったバイデン。オバマ大統領の下で 8 年間副大統領をやったバイデンが、在任中とくに力を入れたのがウクライナの民主化と親欧米化です。

マイダン革命の動きを見ていたプーチンは、対抗措置としてクリミアを一举に併合しました。東部ドンバスではキエフ政権によるロシア語使用制限措置に反発した親口派が独立を掲げて内戦が始まりました。この内戦を収めるために、ドンバスのロシア系ウクライナ人の不満を和らげる方策として特別な自治権を付与するという「ミンスク合意 2」が、ドイツ（メルケル首相）とフランス（マクロン大統領）を保証人に立てて、ロシアとウクライナの間で締結され、以後 8 年間内戦を小康状態に収めることが出来たわけです。しかし、語るに落ちるのは、ウクライナ戦争が始まった後、この合意を強力に推し進めたドイツのメルケル元首相が、「実はミンスク 2 は、ウクライナを強めるための時間稼ぎでしかなかった」と公に発言したことです。

こういった一連の動きを全部ひっくるめて、ロシア側（プーチン）の方にも西側がやってきたことに対する信用が全くないというのが現在の状況です。

もう一つの背景、ネオコン思想

つけ加えておくと、冷戦終結後のアメリカ大統領は 6 人しかいません。ブッシュ（父）、クリントン、ジョージ・W・ブッシュ、オバマ、トランプとバイデンです。この 6 人の大統領の間に、ウクライナとロシアの関係が戦争をするまでに悪化してしまった。どの大統領が悪くしたのだろうか、なぜこんなに悪くなってしまったのか。ずっと考えてきたのですが、私がこの戦争が始まってから気づいたことは、この 6 人の大統領たちの中に、アメリカもしくはアングロサクソンの持つある種の exceptionalism、つまり自分達には一種の「特別な使命」があるという思想があったのではないかということです。それにはおそらく宗教的背景があって、「特別な使命は、それを達成する機会を歴史が自分たちに与えるのを待っている」「自由と民主主義に象徴されるアメリカの価値観を世界中に広げなければならない。アメリカにはその使命がある」というような思想だったのではないのでしょうか。

1989 年の冷戦終結と 91 年のソ連邦崩壊で、まさにその思想を発布する機会が訪れた。「米国の一人勝ち」と言われる状況の中で、これら的大統領は大なり小なり「自分たちは世界のナンバーワンである。自分たちはどの国よりも強大で優れており、『特別な使命』を達成するために、アメリカの価値観を世界中に広げなければならない。従う者には恩恵を与え、従わない者は二度と抵抗できないよう徹底的に弱体化させて抑え込む」という考えを持ってしまった。その結果が、イラク戦争（2003 年～11 年）やアフガニスタン戦争（2001 年～21 年）、旧ソ連諸国のカラー革命（2003 年グルジア、04 年ウ

クライナ、05 年キルギス）、中東での「アラブの春」の政変（2010 年～12 年／チュニジア、エジプト、リビアなど）となって現れたのではないかと。

2000 年に大統領になったプーチンはこれをずっと見ていた。そして服従を拒否した。これまでいろいろな形で挑発を仕掛けられてきた中で、アメリカの価値に従えと最も強硬な対応をとったバイデン政権のもとで、ついに堪忍袋の緒が切れたというのが、戦争に至ってしまった原因ではないかと思っています。

ロシアから見ると、長い歴史の中で 19 世紀の初めにナポレオンのヨーロッパ連合軍に攻められ、20 世紀にはドイツ・ヒットラーに攻められた。今回のウクライナ戦争は、戦っているのはウクライナとロシアである。しかし、ウクライナは欧米の代理戦争を余儀なくされ、実際には西側（米欧 NATO 諸国）からの 3 回目の対ロシア侵略なのだというのが、今のロシア人の根本にある受け止め方です。

ウクライナ和平は実現しうるか？

この後の停戦調停がどう進むか、ウクライナ和平は実現しうるか。今予測するのは難しいですが、私は、停戦は不可能ではない、実現する可能性はあると思います。その先例は、この戦争が始まった直後の 22 年 3 月から 4 月にかけて行われた停戦協議で一旦は成立した「イスタンブール合意」です。トルコが仲介してイスタンブールで行われたロシアとウクライナの代表団の協議で、「ウクライナの永世中立と安全保障協定」というのが仮合意されました。その内容は、①ウクライナは NATO その他の軍事同盟に加盟せず中立化する、②ウクライナの軍事力は一定範囲に制限する、③クリミアは現状維持で 15 年間ロシアとウクライナで二国間交渉を行う、ドンバスの将来も同様に話し合う、④米英仏中ロ（国連常任理事国）はじめ国際的な保証国がウクライナの安全を保障するというもので、これはウクライナ側から提案し、ロシア側も建設的な案だと納得して合意したものです。ロシアはこの合意を受けてキエフなどでの軍事作戦を縮小すると表明し、実際 4 月にキエフから撤退しました。

ところが、交渉が事実上妥結した直後の 4 月 9 日に英ジョンソン首相がキエフを電撃訪問して、「停戦するな」「ロシアと徹底的に戦え」と強力に働きかけた。イギリスと米バイデン政権はウクライナへの軍事支援を強化し、この機にロシアをさらに弱体化させるべく戦争拡大の方針をとったのです。結局、ゼレンスキー大統領もそれに乗って、イスタンブール合意は不成立に終わってしまいました。

もしも 22 年 3 月から 4 月に戦争が終わっていれば、死ななくて済んだ人がどんなに沢山いたかと思うのですが、この時の「イスタンブール合意」に戦争を終わらせる一つの方法があるのではないかというのが、私の希望です。

停戦に向けたいくつかの積極要因

ともあれ、トランプが出てきて、「戦争終結が第一だ」と、これまでと全く違うアプローチを取った結果、米露の協議が進み始めました。停戦に向けたいくつかの積極要因が現れています。

2 月 27 日にイスタンブールで米露局長レベル協議が行われ、まずは米露両国の大使館活動を正常化することが合意されました。翌 28 日には、この協議に参加したロシア外務省のダルチュク北米局長が新しい駐米大使として承認されました。

もう一つは、国際社会でもアメリカの「中立的調停外交」のインパクトが少しずつ浸透して、国連における投票態度が変わってきました。国連ではこれまで西側が主導してロシアの侵略を非難する決議が採決されていますが、2 月 24 日にもいくつかの決議が採択されました。国連総会の決議は意思表示であって拘束力がないのですが、安全保障理事会の決議は拘束力があるので重要です。この日の国連安保理でアメリカが提案した「決議 2774」が採択されました。「ウクライナとロシアとの間の紛争の迅速な終結を訴える。さらに永続的な平和の実現をめざす」という、本当に単純なこれだけの決議ですが、しかし、これはウクライナ問題に関する国連決議としては画期的です。つまり、この中にはウクライナが良いとか、ロシアが悪いとかいう言葉は一つも入っていない。平和を求めるとのことだけです。安保理 15 か国中で賛成したのは米露中を含む 10 か国、棄権したのは欧州諸国ですが、英仏は拒否権を行使しなかった。筋を通したアメリカの指導力と関係国全体の微妙な協力の結果がここに表れてきていると思います。

三番目は、3 月 11 日にサウジアラビアのジッタで開かれたアメリカ・ウクライナの高級事務レベル協議で、アメリカが提案した「30 日間の全面停戦案」にウクライナが賛成して、共同声明が発表されたことです。それまではアメリカとロシアの停戦交渉が先行していたのですが、米・ウクライナの間にも合意が成立した。これを受けてアメリカは即座にウクライナへの「機密情報の共有と安全保障支援」を再開しました。

「30 日間の全面停戦案」をめぐる

今後は、アメリカとロシアがさらに複数のチャンネルで協議を続けることになりますが、アメリカ側はトランプの信任厚いウィトコフ中東担当特使をすぐにモスクワへ送りました(3 月 13 日)。ちょうど今ごろウィトコフ・プーチン会談が行われているはずです。

プーチン大統領が「30 日間の全面停戦案」にどのような態度を取っているか。現時点では直接的な情報はありません。ただ、13 日にはベラルーシのルカシェンコ大統領がモスクワを訪問してプーチンと首脳会談を行っており、その後、会談結果について共同記者会見が行われました。その中で一人口

シアの新聞記者が、「ジッタでのアメリカ・ウクライナの合意についてどう思うか？」と質問しました。

これに対してプーチンは非常に丁寧に、「トランプ大統領が和平に向かって合意を積み重ねていることに感謝します。停戦提案には基本的に賛成です」と言った上で、「ただ、そこにちょっとしたニュアンスがあります」と言うんですね。ニュアンスと言う言葉を使う。

プーチンはまず、「停戦合意は、問題の根本原因を除去し、長期の平和に資するものでなければならない」と言いました。先ほど説明した根本原因 (root causes) です。それに続いて、「ニュアンス」ということについて、例えばこういう問題がありますよと、非常に長い時間を取って説明しました。

「アメリカが提案する停戦にウクライナは合意したようだが、戦争の現実はどうか。クルスクではロシアの全面勝利が近づいている。ここで停戦となったときウクライナ軍はどうなるのか。降伏するのか、ウクライナに帰るのか。停戦が終わったら彼らはどうなるのか」。

「ウクライナとロシアとの間には 2000 キロの国境線がある。停戦となった時、それぞれが所有している武器をどうするのか。停戦の確認を誰がどういう手順でやるのか。30 日の停戦期間中に停戦破りがあった時、どうやってそれを検証し、対応するのか」

「これらの問題について、双方が真剣に話し合わなければならない。我々は停戦に賛成であるが、これらの問題についてよく話し合わなければならない」

プーチンは非常に上手に、トランプとの交渉を大事にすることを明確にした上で、「30 日の停戦」といっても検討しなければならないことが沢山あるということを説明した。最初の反応として至極まともな発言だと思います。日本の新聞には「プーチンは多くの条件をつけて、アメリカにさらなる譲歩を迫っている」というような報道がありますが、私には根拠不明に見えます。

おそらく、ウィトコフとプーチンとの会談でも同じことが話し合われているはずです。この結果をトランプがウィトコフから報告を受けた時、次にトランプがどう出てくるか。

停戦というのはまだ最終的な終戦ではありません。しかし、とにかく一回戦争を止める、停戦を実現するだけであっても、今プーチンが出したような問題をそれなりに解決しないと事態は進まないと思います。それなりの解決というものをトランプがどう考えるか。ボールは再びアメリカの手に返って、これからどうなるのかというところです。一刻も早い停戦実現を期待して、交渉の行方を見守りたいと思います。

増えてきた現実主義の論調

現在進行形の「トランプ停戦」の動きについて本日お話しできることは以上ですが、少し補足しておきます。

ウクライナ戦争をめぐる様々な議論の中で、とくにアメリ

力では現実主義の論調が増えています。現実主義というのは、これまでのネオコンの「アメリカがナンバーワンだ」「アメリカの言うことを聞け」という発想ではなく、国際政治を力の均衡という観点から冷静に分析して、地域の安定と平和を実現しようとする考え方ですが、その双璧はジョージ・ケナンとヘンリー・キッシンジャーです。ケナンは米ソ冷戦時代のアメリカ外交の第一人者で、「ウクライナの中立を破るようなことをしたら必ず戦争になる」と言って、ウクライナの NATO 加盟に強く反対しました。キッシンジャーも同じです。

この二人が亡くなって、今はジョン・ミアシャマー（シカゴ大学教授）、フランスの人類学者エマニエル・トッドなどが、活発に論陣を張っています。2022 年に「How the West brought war to Ukraine」（西側はいかにしてウクライナに戦争を持ち込んだか）という本を書いたベンジャミン・アベローという人もいます。さらにジェフリー・サックス、スコット・ホートン、レオニード・ラゴージンといった、いろんな人たちが現実主義の立場から発言しています。

アレクサンドル・パノフ氏との対話

これに関連してもう一点。元駐日ロシア大使のアレクサンドル・パノフ氏と私が共同で出した本「現代の戦争と平和～ロシア VS 西側世界」（K&K プレス）で、パノフ氏が、キッシンジャーが「ウクライナでの戦いはロシアとアメリカの政治対話が失敗したために起こった」と結論づけて、次のように発言したことを紹介しています。

「プーチンは素晴らしい外交分析能力を有する人物だ。西側諸国は安全保障に関するプーチンの懸念に注意を払うべきだった。ウクライナの中立的立場と NATO 非加盟を求めるプーチンの声に耳を傾けるべきだった。アメリカの支配層には、外交政策を宿敵との個人的な対決と見なし、正義の名目のもと敵を説教しようとする悪い癖がある。相手側にも理由があることを理解しないのだ。」（同書 161 頁）。

パノフ氏はドイツの宰相ビスマルクの面白い言葉も紹介しています。ビスマルクは、「ロシアは強い国だ」と言った上で、この強大な国に立ち向かうには別の方法をとった方がいいと言った。

「ロシアの力を破壊できるのは、ウクライナをロシアから引き離し、一つの国家の中で二つの民族を戦わせた場合だけだ。ウクライナのエリートの中から裏切り者を見つけ出して育成し、彼らの力を借りてウクライナの自己認識を変える必要がある。そうすればウクライナ民族はロシアのすべてを憎むようになる。あとは時間が解決するだろう」（同書 160 頁）。

現実には起きていることを見ると、アメリカのネオコンの大統領たちが同じことを意図したかどうかは分かりませんが、まさにこのような動きが現在のウクライナの悲劇を生んでしまったと思います。

戦争を終わらせるためにどうしたらいいか。パノフ氏が書

いていることも大いに参考になります。

日本外交の立ち位置

最後に日本外交について一言。私の意見では、戦後の日本外交の原点は「人の命を大事にする」ということです。第二次世界大戦で、あれだけ大きな戦争をやって、あれだけの多くの人を殺し、あれだけ多くの日本人を死なせた日本という国にとって、とにかく人の命を大事にする平和外交こそが第一に目指すべき方向だと思います。だから絶対に戦争は始めてはいけない。始まった戦争は一刻も早く停戦に持っていかなければならない。

したがって、トランプ大統領の「ウクライナ戦争を終わらせる」という公約は非常に貴重です。停戦協議が米露、米ウの間で具体的に始まった今こそ、これを支援し何らかの形でこの方向を定着させていくことが求められています。ここで失敗すると、せっかくトランプが開いた「機会の窓」(windows for opportunity) が閉じてしまう可能性がある。そうすると再び窓を開いて、停戦に持っていくのは非常に難しくなります。

日本は、8 月 15 日の太平洋戦争終結をめぐる閣僚会議や御前会議の例に見るとおり、始めた戦争を終わらせるのがいかに難しいか、身に染みて分かっている国です。ここはやはりトランプを支持して、停戦実現へ最大限の協力をすべき時です。そのことは日米関係の強化にも十分資することになると思います。

すでに述べたように、ロシア側が言う根本原因は二つです。その二つの条件 (Root Causes) が解決すれば、ロシアはこれ以上戦争を続けることは無いと私は確信しています。「ウクライナが終わってもロシアはまた別の国を侵略する」「ロシアは果てしなく戦争をし続ける」とヨーロッパのタカ派は言っていますが、私はそうは思わない。外務省にいたとき何回か日ロ首脳会談に同席したことがありますが、私が知っているプーチン大統領は実際、きわめて論理的に思考し、現実的な判断力を持った政治家です。

日本だからできる停戦貢献を！

外交の要諦は、相手の立場に立って考える力を持つことです。

太平洋戦争で、天皇の二回の聖断をもって最終的にポツダム宣言を受諾する際に、日本政府は一つだけ条件を付けました。それは戦争終結後の日本の政治制度において、当時の言葉で言う「国体」、つまり皇室だけは保存してほしいという条件です。当時、戦争を止めるべきだと主張した祖父・東郷茂徳外務大臣にしても、度重なる空襲と広島・長崎の原爆でもはや勝ち目はないと理解していた一部の政治家や軍人も、もしアメリカが国体を無くす（＝天皇制を廃止する）と回答していたら、それこそ国が消滅するまで際限なく戦争を続けて

いた可能性があります。これは本当に恐ろしいことでした。

その日本に対して、アメリカは最後の答えとして、「それは自由に選択した日本国民の意志による」と回答し、これをもってようやく戦争を終えることが出来たわけです。このアメリカの返事は本当によく考えられたもので、グルー元駐日大使やルースベネディクト（文化人類学者）といった、当時の日本人のメンタリティーや日本の価値観（国体護持）をよく知り、理解していたアメリカ人がいたからこそできた返事でした。

だから逆に言うと、今もウクライナへの軍事支援を強化して戦争継続を強く主張している欧州の人たちに対して、もっとプーチンとロシアの研究をして、ロシアの論理を本当に理解して、外交に当たるべきだと言わなければならないと思うのです。その点でも、日本の経験をもって言えることがあると私は思います。

石破総理には、日本だからできる停戦貢献を是非お願いしたいと思います。

＜質疑応答＞

—— ゼレンスキー大統領の正当性の議論がアメリカ、ロシア双方からあったと思います。昨年 5 月の大統領任期切れのあと、戦時体制ということで大統領選挙を先延ばししています。この停戦協議が進展して、さあ最終合意となった時に、ゼレンスキー大統領の位置というのはどうなるとお考えですか？

東郷 これは、基本的にはウクライナの政治制度における手続きの問題です。私は、トランプとプーチンとゼレンスキーの間で、これは外交において最も重要な前提条件の一つですが、「この相手となら会話が成立して合意ができる」という共通認識が生まれたならば、その手続きの部分は何らかの方法で解決できると思います。例えばゼレンスキーは現在、法律によってプーチンと交渉することを禁じている。その法律はまだ生きています。ですから、そういう信頼・共通認識ができたなら、ゼレンスキーはその法律を撤廃しなければならないと思います。

ウクライナの国内法で、戦争が続いている間は選挙をしくてもよいという規定があるわけですが、しかし、交渉が進展していった場合には、やはりどこかの段階でゼレンスキーは大統領選挙をしなければならないと思います。それをどのタイミングでやるかは、複雑な技術的問題があると思うので、今私は確かなことを言うことはできません。ただ、やっぱり根本は、お互いに「この人と交渉ができるかどうか」ということにかかっていると思います。

—— 「力による現状変更は許されない」と、昨日も日本の外務大臣は G7 で発言していますが、この日本政府の立場については、どうお考えでしょうか？

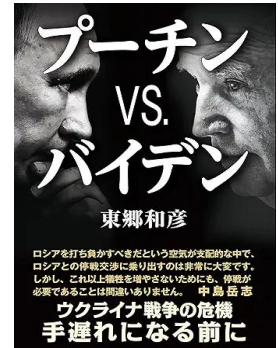
東郷 その議論を詰めていくと、「悪かったのは力による現状変更をやったロシアだ」「だから、『ロシア＝悪』という見方を変えてはならない」というところに行きつくと私は思います。これは現在のトランプ政権の考え方とは相いれない。「良いか悪いかの議論は止めよう。でないと戦争は終わらない」というのがトランプの立場ですから、これに真向から抵触する。だから先の発言は、今の戦争を止めるためには「賢くない議論」だと思います。そういう観点だけからも、私は支持しません。これが一つ。

もう一つは、これまで説明したように、ロシアから見ると、「力による現状変更」をやってきたのは西側です。要するに、ナポレオン、ヒットラーに次ぐ三回目の侵略を西側から受けているというのがロシア側の認識です。ところが、この認識を西側は誰も共有していない。そこで、「力による現状変更をやったのはロシアだ」「悪いロシアから今後もウクライナを守る」という固定観念からどうしてもぬけられない。本当の議論をするのであれば、ロシア側の言い分ともよく突き合わせて、これまでのロシアとウクライナ、ロシアとアメリカ・欧州の関係がどうであったか、相手の論理を理解したうえで、議論しなければならないと思います。外交とは、最終的には、相手の立場に立って考えるということですから。（了）

＜参考図書＞

「プーチン VS バイデン」
～ウクライナ戦争の危機

東郷和彦著
K&K プレス
2022 年 10 月刊
定価；1600 円＋税



「現代の『戦争と平和』」
～ロシア VS 西側世界

アレクサンドル・パノフ著
聞き手；東郷和彦
K&K プレス
2024 年 11 月刊
定価；1600 円＋税

2 月 1 日、東京大学・本郷キャンパスにて、ロシアの著名な映画評論家アントン・ドーリン氏の講演会が行われました。主催は東京大学文学部スラヴ語スラヴ学研究室（楯岡求美教授）で、日本語通訳は吉岡ゆきさん、モデレーターは守屋愛さんが担当しました。2022 年 2 月のウクライナ戦争開始後いち早く抗議の声を上げ、現在はラトビアのリガを中心に活動しているドーリンさんの話を聞こうと、会場の法文 2 号館の大教室はほぼ満席。150 名以上の聴衆で埋まり、戦争下のロシアとウクライナの映画産業や映画人たちの動向について、ドーリンさんの話に耳を傾けました。講演後の質疑応答はとても活発で、日本に住むロシア人参加者からもさまざまな意見や質問が出ました。

以下は、ドーリンさんの講演と質疑応答の内容です（文責；編集部）。

映画評論家 アントン・ドーリン氏 講演会／25年2月1日

講演録

『逃走と沈黙』～ロシア映画と戦争

はじめに

「すべての種類あるいはすべての形態の芸術の中で、われわれにとって最も重要なものは映画である」。

これは、ロシア革命の指導者ウラジーミル・レーニンの言葉です。この言葉をレーニンが本当に言ったかどうかは若干疑問ですが、そのことはさほど重要ではありません。重要なのは、権威主義あるいは権威主義国家にとって、これは 20 世紀においても 21 世紀においてもそうですが、映画芸術というものは最も重要かつ危険なパロディの形態であるということです。

映画は芸術の一つのジャンルですが、これは人々が誰でも見ることができる、人気のある芸術です。だからこそ、その制作者が国家に反対の立場を取る場合には、国家にとって危険な芸術であると言えます。反対に制作者が国家の意図に沿う形で作品を作った場合、それが国家のプロパガンダ（政治宣伝）に都合のよい形で仕上がった場合には、国家にとって映画はとても有益なものでした。ただし、そもそも制作者がどのような意図をその映画に込めたのかということは重要ではありません。というのは、真の芸術というものはいくつもの非常に多くの解釈を可能にするからです。

日本映画の中の戦争

今回の私の日本訪問は、最近出版した本の宣伝のためのものでしたが、本日このような形で講演する機会を与えていただいたことに感謝いたします。私も私の家族も、日本と日本



文化にとっても強い結びつきを持っています。ソ連崩壊後に日本映画についてロシア語で書かれた最初の本は、北野武監督の作品についての私の論評でした。日本の映画文化とロシアの映画文化との結びつき・関連というものを、私は長年考えてきました。日本の映画文化が戦争というテーマをどう考え、映像に反映し、表現してきたかということにも関心を持ってきました。

「ゴジラー1.0」(ゴジラマイナスワン／2023 年 11 月公開)という映画があります。昨年、アメリカのオスカー（第 96 回アカデミー賞）で「視覚効果賞」を受賞した作品で、これはすでに何十本も撮られている怪獣映画の一つですが、しかし、生き残った者の罪の意識、破壊と殺戮の戦争の中での人間というものを反映した映画作品の一つの例でもあります。

熱核戦争、そして熱核戦争に関連したアルマゲドン（世界の終わり）というテーマですが、大変悲しいことに、現在、

それは焦眉の課題になっています。昨年のオスカーではクリストファー・ノーラン監督の「オッペンハイマー」が作品賞、監督賞などいくつもの賞を獲得しました。その数ヶ月後に開催されたカンヌ映画祭のポスターは、黒澤明監督の「8 月のラブソディー」（1991 年 5 月公開）からデザインされたものでした。「8 月のラブソディー」は、長崎の原爆をめぐる映画であることはもちろんですが、私たちが住んでいるこの環境をどう未来に残すのか、今をどう生きるのかという意味でも、世界の映画史に残る傑出した作品の一つであると私は思っています。

「映画と戦争」「私自身と祖国ロシア」について

ということで、守屋愛さんから「講演のテーマは何にしましょうか？」と問われたときに、私は「映画と戦争」というテーマをごく自然に選びました。

しかしながら、今日の私の話は、映画評論家あるいは映画研究者として戦争をテーマとした映画作品を分析してみせる、というような内容ではありません。私が話したいのは、映画芸術、映画だけではなく他分野も含めて芸術というものが、現在ロシアがウクライナで戦争を行っている下で、どのような状況にあるのか、どのような役割を果たしているのかについてです。そしてロシアについて、私自身と私の祖国について語るということも、本日の私のテーマです。私自身について語ることは、ごく個人的なケースではありますが、現在の状況の中では、ロシア文化の文脈の中で生きることがない人たちにとって興味を持ってもらえることだろうと思います。

2022 年 2 月 24 日の朝のこと

この地球上に住む何百万人のロシア語話者の人たちと同じように、私はロシアがウクライナに侵攻を始めた 2022 年 2 月 24 日の早朝のことをよく覚えています。

この日、私は朝早く目を覚ましました。家族は皆まだ寝ていました。というのは、私はこの日ボルガ川の畔にある大きな都市サマラに飛んで、映画について講演をすることになっていたからです。ニュースを聞いて、私が最初に衝動的に思ったのは、「今日の講演は中止にすべきだ。そのような講演はもう誰にも必要ないし、私自身にとっても必要ない」ということでした。しかし、これは非常に強いショックを味わった人間が概して取る行動ですが、既定の日程をあらかじめ決めた手順通りにこなすという行動を、実は私はここで取ってしまいました。結局、私は荷造りをして空港へ向かったわけですが。

空港に着いた時、空港にいるすべての人々が非常に驚いたような表情をしていたことを覚えています。つまりあの時点で、人々はまだ自分の感情を隠すという術を身に付けていなかったのです。嫌なこと、嫌な考えから逃げるといった術を人々はまだ身に付けていなかった。すべての人の表情から、何かとてつもなく恐ろしいことが起きてしまったと感じていることが読み取れました。

「戦争は悲劇であり、戦争は犯罪である」

サマラに着いた私を出迎えてくれたのは、現地の映画館の人たちでした。私は、出迎えてくれた人たちにこう言いました。「今日の私のレクチャーでは、映画については話しません。私は今日始まった戦争について話をします。もし反対と言うのであれば、私はすぐ飛行機に乗ってモスクワに帰ります」。幸いなことに、反対はありませんでした。

その日、私が一番強い印象を受けたのは、「すべてが失われたわけではない」ということでした。私は、講演で「戦争は悲劇であり、戦争は犯罪である」と言いましたが、私の言葉に反論した人はいませんでした。私はかなり厳しい言葉で語ったのですが、聴衆は私の言葉に好意的に反応し、拍手までしてくれました。そこで私は、自分の意見をより多くの人々に表明すべきだと考えました。つまりインターネット上の私のオーディエンス（聴衆、観客）に向かって、私の意見を表明すべきだと考えたのです。

翌日、私は空港でモスクワに帰る飛行機を待っている間に、友人や映画関係者など多くの人に電話をしました。

「YouTube にビデオをアップしよう。みんなで録画しよう」。いろいろな反応がありました。参加すると言ってくれた人、嫌だと断った人、迷っている人たち…。それぞれが様々な理由を挙げました。とはいえ、YouTube ビデオを撮影するのに十分な人が賛同してくれたので、私たちはすぐにビデオを作り上げ、翌日には YouTube にアップしました。約 50 万人が視聴してくれました。

そこで私は、次は直接観客に向けてアピールするべきだと考えました。その舞台として私が考えたのはモスクワの映画館です。ちょうど、ハリウッド制作映画「バットマン」のロシアでの公式公開が予定されていて、私がそのオープニングで司会をすることになっていました。会場は、モスクワで最も有名で最も大きな映画館「カーロ・オクチャーブリ」（客席数 1500）です。皆が「バットマン」のロシア公開を心待ちにしていたので、チケットは完売状態でした。私は、映画館の舞台上から「この戦争に私は反対だ。皆さんも賛同してください。一緒に『戦争反対』と表明してください」と呼びかけるつもりでした。しかしながらそれは実現しませんでした。なぜか？「バットマン」のロシアにおけるオフィシャル上映が中止されたからです。ハリウッドのメジャー映画スタジオは、わずか 2 日間のうちにロシアからの完全撤退を表明し、実際にそう行動しました。ということでバットマンはオフィシャルな形でロシアから立ち去ったのです。

「ロシアの敵」とみなされ国外へ

それから 2～3 日の間に、非常に抑圧的な法律が制定されました（「ロシア軍に関する虚偽の情報を広める行為を禁止する法律」＝違反した場合、最長 15 年の禁固刑）。これによって、戦争に反対する行動が禁止されるだけでなく、戦争という言葉自体が取り締まりの対象になりました。並行して、

SNS でいくつもの脅迫メッセージが送られて来るようになりました。それは、戦争に反対し続けるならば、私個人だけでなく、私の親しい人、私の家族そして何よりも私の子供たちの身に危険が及ぶぞという内容でした。事態は急スピードで展開していきました。侵攻の前日に、「あなた方はロシアから出ていくつもりか？」と聞かれたら、私も妻も子供たちも 100% の自信をもって、「いいえ、ロシアを立ち去る気持はありません。私たちはずっとここで暮らすつもりです」と答えたいと思います。しかしながら、侵攻が始まってから 10 日後に私たちはロシアを出国しました。すでに国際航空券の購入が不可能だったので、鉄道で移動し、そして徒歩で国境を渡りました。その時点では出国は一時的なものだと私たちは思っていました。それからほぼ 3 年経ったわけですが、この間私は一度もロシアに戻っていません。出国の 8 ヶ月後に、私は「外国の代理人」と国から認定されました。つまり私は公式に「ロシアの敵」とみなされたわけです。ロシアの現在の法制度の下では、私は犯罪者なのです。

「戦争は 2014 年にもう始まっていた」

このようなドラマティックな出来事には、もちろん前史というものがあります。全ては 2014 年のクリミア併合から始まりました。その当時、ロシアの政治的な検閲ははるかに弱いものだったので、何十万人の人々が併合に抗議しました。しかしながら、他のより多くの人たちはこの事態を歓迎しました。

抗議を行った人たちの中には、映画関係者、映画作家たちも数多くいました。特に独立系の映画、国際的な映画祭に作品を出展するような人たち、いわゆる作家主義の映画製作者たちが多く抗議に参加しました。抗議文を作成して署名をしたり、ウクライナの映画関係者を心から支援するアピール文に賛同したりする人もたくさんいました。もちろん私もその一人だったわけです。

22 年 2 月に侵攻が始まって以降、相対立する陣営から聞こえてきた台詞は次のようなものでした。「これまでの 8 年間、あなたは何をしてきたのか」。プーチン政権を支持する人と反対する人の間では、この台詞が異なった意味を持っていました。プーチン支持者たちは、「この 8 年間、ウクライナ当局はロシア語話者を抑圧し弾圧してきた」と。これがウクライナに侵攻する口実の一つになったわけです。

プーチンに反対する人たちが同じ台詞を言う時は、全く違う意味を持っていました。つまり「戦争は 2014 年にもう始まっていた」ということです。

オレグ・センツォフ監督の冤罪事件

この戦争がすでに始まっていたことを立証する事件があります。オレグ・センツォフというウクライナ人映画監督が、2014 年の 5 月にクリミア併合を批判したかどで逮捕され、テロ攻撃の計画という冤罪で 20 年間の実刑判決を下された事件です。私はオレグ・センツォフのロシアでの裁判で、弁

護側の証人として証言しました。センツォフを支持した私の行動は、同じ映画人としての連帯行動であり、それと同時に私自身の市民としての政治的立場を表明する行動でもありました。

その当時は、例えばモスクワの大統領府の前で、ウクライナ語で「政治犯を釈放せよ」と書かれたポスターを持って抗議行動を行うことが可能でした。一方でそういう行動に参加しながら、他方では国営テレビ局や国営ラジオ局の番組に出演して新作映画を紹介するといったことも出来ました。

しかしながら、2022 年になる頃には、それは非常に困難になっていました。そして、侵攻が始まると、こういった行動は瞬時にして不可能になりました。かなり控えめな表現で、例えば「NO WAR」(戦争はダメだ)と、たった一つの単語を出しただけでも拘束されるわけですから、プーチン政権に反対する行動がとれなくなってしまったのです。

オレグ・センツォフ監督は、その後私たちの努力もあって釈放され、今回の戦争が始まる前にウクライナに帰ることができました。現在、彼はウクライナ軍に参加して、その一員として戦っています。

戦争はロシアとウクライナの映画にどう反映されたか

このように、政治的な断絶あるいはロシア社会の裂け目というものが始まったのは、2014 年のクリミア併合がきっかけでした。これが映画においてどのように反映されたかを追ってみるのは興味深いことです。

ロシア映画界もウクライナ映画界も、ソビエト連邦あるいはソ連映画の継承者です。ロシアで作られた映画にもウクライナで作られた映画にも、戦争をテーマとした作品が数多くあります。その中には国内外の映画祭で受賞した優れた作品もあれば、単に国の政治宣伝に沿って作られ今日では古びて見るに堪えないものもあります。その両方がどちらの国の映画界にもあります。

2014 年以降ウクライナにおいては、映画制作者は新しい戦争映画を模索するようになりました。そういった作品の特徴は、ドラマであるということ、少ない予算で作られた作品であるということ、そして人々にとっても、作者にとっても、自らの痛いところを突いた、常日頃思い煩っていた問題を鋭く捉えた映画作品であるということです。それは 21 世紀に生きる私たち、特に若い世代の「内なる葛藤」、コンフリクト(対立、緊張状態)というものを追求する作品です。私たち、特に若い人たちが、とても原始的な戦争というものの、殺戮と憎悪というものに直面してしまった時どうなるか。敵を探すことに人々が血眼になる、自分の隣人の中にまで敵を探そうと血眼になるといった状況を反映した映画作品です。

ここでは 3 つだけ作品名を挙げておきます。ヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督の「アトランティス」(2019 年)、ナタリア・ヴォロジビト監督の「悪路」(2020 年)、セルゲイ・ロズニツァ監督「ドンバス」(2018 年)。どの作品も世界の権

威ある映画祭に出展され、賞をとっています。ほかにもたくさん作品があります。これら作品の舞台は現代であり、「アトランティス」にいたっては未来の舞台設定です。

2014 年以降のロシアの戦争映画の特徴

ロシアにおいても 2014 年以降、戦争映画が以前より多く作られるようになりました。ロシアで作られている戦争ものは、そのほぼすべてがブロックバスター（巨費を投じて興行的に大きな成功をめざす）作品で、特撮を駆使したものです。その内容は必ずドイツ・ファシストとの戦い、つまり舞台設定が過去である作品です。

ウクライナで作られる戦争映画が自分たちの内なるコンフリクトというものを題材としているのに対して、ロシアで作られる戦争映画は外部とのコンフリクトです。外部の相手は敵であり、敵と戦って、それを殲滅する、勝利するという内容です。

ロシアの戦争映画には、人々から募金を集めて作った国民的な映画というものもあります。「28 人のパンフィーロフ軍団」（邦題「パトリオット・ウォー ナチス戦車部隊に挑んだ 28 人」／2017 年 7 月公開）という作品です。この作品の成功の後すぐに、国が戦争映画に国家予算から多額の資金を投入するようになりました。ロシアの戦争映画の中には、正月の娯楽映画のジャンルに入ることを意図したような作品もあります。例えば、アレクセイ・シドロフ監督の「T-34」です。独ソの戦車戦を題材にした映画ですが、「T-34」は日本でも公開され（邦題「T-34 レジェンド・オブ・ウォー」／2019 年 10 月公開）、かなりの収益を上げました。

映画「スターリングラード」

ロシアの最近の戦争映画で特に予算が大きかったものの一つが、フョードル・ボンダルチュク監督の「スターリングラード」（2013 年 9 月公開）です。これは IMAX（アイマックス／高解像度カメラ）で撮られた作品で、ドイツ人俳優やアメリカ人作曲家も駆使した、いわばロシア版ハリウッド映画と言えるものです。

映画「スターリングラード」は過去を題材としていますが、それを現代化してもいます。なぜなら、この映画の主人公は、福島原発事故で人々の救助にあたるレスキュー隊員だったからです。つまり、戦争は天災と同じ扱いになっています。戦争は、その中で人間一人一人の質とモラルが問われるものではなく、あらゆる人が巻き込まれる天災であるという扱いなのです。

興味深いことに、この「スターリングラード」という戦争映画は、当時の現実を反映した映画ではなく、その空気中に漂っていた近い未来を予測した映画でした。この映画が公開されたのは、2013 年のクリミア併合の文字通り前年でした。

さて、映画「スターリングラード」のプロデューサーはアレクサンドル・ロドニャンスキーです。彼は、ロシアの映画界でとてもパワーのあるプロデューサーで、例えばアンドレ

イ・ズビャギンツェフ監督の映画プロデューサーを常に務めてきました。そして物事が起きた時には、これまた力強く抗議を行う人でもあります。アレクサンドル・ロドニャンスキーは、2022 年 2 月のウクライナ侵攻でプーチン政権を強く非難して、国を出ました。現在はロドニャンスキーもまたロシア当局から犯罪者つまり「国家の敵」と公式に認定されています。

実はこのロドニャンスキーがプロデュースしたある映画が、2022 年のウクライナ侵攻より前に、この侵攻を予見していました。それは、アンドレイ・ズビャギンツェフ監督の「ラブレス」（2018 年 4 月公開）という映画です。この作品の一つのテーマは夫婦の離婚で、これは戦争のメタファー（暗喩）です。最も親しかった肉親が分かれるということ、つまりお互いに親しい民族、親しい国である人たちが別れてしまうというのがテーマだったと言えます。

映画「セバストーポリ攻防戦」関係者たちの戦争

クリミア併合後のことになりますが、2015 年にロシア・ウクライナ合作映画の最後の作品が公開されました。「セバストーポリ攻防戦」という戦争映画（邦題「ロシアン・スナイパー」2015 年 10 月公開）で、監督はセルゲイ・モクリツキーです。この映画の脚本を書いたロシア人は、作品の公開 8 年後に志願兵としてロシア軍に入隊し、バフムトをめぐる戦いで戦死しました。編集を担当したウクライナ人はウクライナ軍に入隊していて、やはり同じ 8 年後に東部戦線で戦死しました。この映画のプロデューサーであったナターリヤ・モクリツカヤ、この人はロシア国内に映画館ネットワークを持っているのですが、自分の所有する映画館の一つで、兵士を集める「徴兵部」（軍事委員会と呼ばれる）を開設しました。

今とりあげた一つの映画のケースは、私たちがこれまで持っていた考えがいかに幻想であったかということをよく表していると思います。一連の事実は、「芸術は人々を一つにする」「プロフェッショナル同士の連帯は戦争反対のパワーになる」という考えが幻想であったことを裏付けたのです。

そして、2022 年以降の状況では、ロシアで制作される戦争映画（過去の戦争を題材にしたブロックバスター映画）とウクライナで制作される戦争映画（真の戦争とは何かを追求しようとする作品）との、二つの間の断絶がより明確で、よりラジカルなものになりました。

歴史上最も「映画うつりのよい戦争」

そもそも今回の戦争は、歴史上最も「映画うつりのよい戦争」であると思います。

すべての戦闘参加者、戦争の目撃者、そしてすべての犠牲者のポケットに、相当性能の良い撮影カメラがある。同時に性能の良いスクリーンがある。そういう意味で史上初めての戦争だと私は思います。

ウクライナの戦争現場を映して初めてアメリカのオスカーを受賞したのが、ミスティスラフ・チェルノフ監督の「マ

リウポリの 20 日間」(2023 年 4 月公開)でした。昨日、アメリカのサンダンス映画祭が終了したのですが、そこで監督賞を受賞したのは同じチェルノフ監督の撮った「アンドレイエフカまでの 2000 メートル」という作品です。10 日後に開幕するベルリン映画祭に参加するウクライナ映画は 4 本ありますが、全てドキュメンタリー作品であり、全て戦争映画です。そのうちの 2 本は、それまでずっと劇映画を撮っていた監督による初めてのドキュメンタリー映画です。つまり劇映画からドキュメンタリー映画への移行がウクライナでは起きている。

戦争下のロシア映画産業

一方ロシアに目を向けてみると、ウクライナ戦争の開始後、制作される映画の本数は急激に少なくなりました。これは決して驚くべきことではありません。というのは、2022 年 2 月以降、ロシアにおいては「戦争」という言葉自体が禁じられたからです。

「バットマン」をはじめとするハリウッドのブロックバスター映画がロシアから消えてしまったので、私を含む多くの映画関係者は、ロシアの映画産業は衰退するのではないかと、少なくとも向こう 1 年間は衰退すると予測していました。しかしこの予測は間違っていました。開戦一年後の新年つまり 2023 年の正月休みに公開された新作映画はロシア史上最高の観客者数と収益を集めたからです。ロシア映画の大作「チェブラーシカ」です。これはソ連時代(1969 年)に最初のアニメが作られた「おとぎ話映画」の新作です。販売されたチケット数は 2200 万枚でした。

「チェブラーシカ」はコンフリクトが一切存在していない映画です。本当に甘い、文字通り甘いおとぎ話です。なぜ文字通り甘いのか。映画のテーマは、二つのお菓子工場の競争、大きなチョコレート工場と小さなチョコレート工場の対立だからです。

この作品を通して流れているテーマは、真実あるいは本当に大切な問題というものを口に出さない、相手と話し合うことをしない、ということです。そして主人公の一人である 6 歳の男の子は、そもそも言葉を発することができない、喋ることができない少年という設定になっています。つまり、社会全体が沈黙せざるを得ないというトラウマがこの映画には表れていると思います。しかし、監督や脚本家をはじめこの映画の制作者たちがそれを意図して作った映画とは思えません。おそらく意図せずしてこういう作品に仕上がったのだと私は考えます。

ロシアを覆う「おとぎ話映画の波」

今では、おとぎ話がロシアで作られる映画の主流となっています。それらは皆、ロシアを舞台にしたおとぎ話です。例えば、世界的に有名な「オズの魔法使い」やアンデルセン原作の「火打石」といったお話も、全てロシアが舞台のロシアのおとぎ話として作られています。しかも、おとぎ話映画を

見る観客は、子供あるいは子供連れ家族に限定されるわけではありません。

かといって、こういった映画作品が全く政治的な内容を欠いているとは言えません。例えばロシアの昔話として有名で人気のある「カワカマスの命令により」という映画は、ソ連時代から何回か作られていましたが、その新作が最近公開されました。主人公はエメーリヤという若い男で、言葉をしゃべる魚の力を借りて、いくつかの願い事を叶えていきます。最後に彼が何をやってのけるかということ、なんとイギリスの王家がロシアを侵略しようとしているのを撃退して、ロシアを侵略から守ったという話になっているのです。

「ブレーメンの音楽隊」という作品が最近公開されました。盗賊一味がブレーメンの町を侵略し、我が物顔に振舞おうとするのを、動物たちが町を守り、もとの王様が再びこの町を治めるのを助けるという映画です。アンデルセンの「火打石」という作品をもとにした映画では、原作を変えてしまって、主人公である兵士が前線で戦っている時に、恐怖に駆られて逃げていく。しかしその後後悔して、再び祖国を守るために前線にもどるという内容になっています。

「現実逃避」とソ連時代へのノスタルジー

ということで、文字通り「おとぎ話の波」がロシアを覆う事態になっています。その理由はいくつか挙げることができます。まず一点目は、多くの人々が逃げ込むところを求めている「現実逃避」の気分です。第二に、これは「社会の幼児化」を表しています。そして第三に、ハッピーエンドを求める非合理的願望、あるいはハッピーエンドを信じたい気持ちです。

その背景にあるのは、ソ連時代(ソ連という帝国)へのノスタルジーです。というのは、こういったおとぎ話の題材そのものは昔から広く知られていたもので、原作がソ連以外の作者のものであっても、ソ連時代に何回も作家たちによって語り直され、映画化された作品であって、いわばソ連時代の貯金箱の中身です。つまり、人々はおとぎ話という一種のタイムマシンに乗って、ノスタルジックなソ連に舞い戻ることができるという仕掛けになっているのです。今やロシアの多くの観客にとって、ソビエト時代はもはや想像の世界に属しています。ソ連解体から 34 年。若い観客の多くはソビエト時代にまだ生まれてなかったか、あるいは非常に幼かった人たちです。そういう人たちにとっては、ソビエト時代のノスタルジーというのはなお一層心地よいものです。

チェブラーシカは、ソ連時代の児童文学者エドワルド・ウスペンスキーの絵本に登場するキャラクターで、それがアニメ化されて大人気になったのですが、一種の「ソ連版ポケモン」と言えるかもしれません。いずれも想像上の生き物です。興味深いことに、この想像上の生き物であるチェブラーシカがロシアのウクライナ軍事侵攻、ロシアの公式用語でいう「特別軍事作戦」のシンボルとなってしまっています。というの

は、軍人は迷彩服に部隊のシンボルを縫い付けたりするのですが、そういったシンボルの一つとしてチェブラーシカが使われており、そのスローガンが「отчебурхануть」（オト チェブラーフヌチ）※。チェブラーシカという名前の動詞形です。もともとチェブラーシカというのは「ひっくり返る」「ばったり倒れる」という意味から来ているので、「相手をやっつけるぞ!」というスローガンとともにチェブラーシカが迷彩服に縫い付けられる事態になっています。

「自己検閲」、しかし予期せぬ効果も

ロシア映画がおとぎ話に傾斜する事態の背景にあるのは検閲（あるいは自己検閲）です。ロシアで映画作品を公開するためには、当局から許可証をもらわなければなりません。ライセンスの発行が拒否されると映画を公開することができません。ライセンスをほぼ確実に取ることができるのが昔話、おとぎ話なので、プロデューサーたちは自己検閲の結果として、ハードルの低いおとぎ話映画の制作へと流れているわけです。

ただし、「おとぎ話の波」の予期せぬ効果というものも実は認めることができます。どういうことか？ 特別軍事作戦を露骨に賛美する映画はほとんどロシアで作られていないという現状です。

「目撃者」という映画がロシアで作られました。これはロシア軍がキエフ近郊で起こした「ブチャの虐殺」を扱っています。「この虐殺は実はフェイクであった、ロシア軍は全く関わっていない」と主張する映画です。しかし、この映画は公開されたものの、全然人が入りませんでした。というのは、人々は毎日のようにテレビやニュースでプロパガンダを聞かされているので、わざわざお金を払ってプロパガンダ映画を見に行ったりはしなかったのです。

新作映画「巨匠とマルガリータ」がもたらした希望

では現状において、ロシアの映画界は全く明かりの見えない闇なのでしょうか？ そうとも言えないと思います。

昨年、ロシアの映画界で非常に話題になったのが新作映画「巨匠とマルガリータ」の公開です。監督はミハイル・ロクシン。彼はロシアとアメリカの二重国籍を持っている人です。そして、プーチンが始めた戦争にはっきりと反対を表明した人でもあります。当局の様々な妨害にもかかわらず、この映画は完成にこぎつけ、公開されました。ブルガーコフの「巨匠とマルガリータ」は、ロシアの 20 世紀文学作品の中でも一番人気のある長編小説ですが、この新作映画「巨匠とマルガリータ」は公開されると大変な人気で、オフィシャルな観客数は数百万人にのぼりました。

この映画の脚本は、ミハイル・ロクシンとロマン・カントルが共同で書きました。これはブルガーコフの小説の最初の優れた映画化だと言えるでしょう。映画の舞台は 1930 年代のモスクワです。ある著名な作家が思想的理由でソビエト作家同盟から追放される。政治的に全く無力な作家は、新しい

文学作品を書く。作品の舞台であるモスクワに悪魔の一軍が降り立つと、作家自身と愛人のマルガリータも作品世界に入っていく。作家は、想像の世界に没入することによって現実には打ち勝つという内容になっています。

ロシアの人々が、新作が公開されたと言って映画館に急ぐ姿を見る時、彼らは単にこの閉鎖的な現実から逃避するためだけに映画館に行くのだとは考えたくありません。つまり、映画の中に作り上げられた空想の世界というものが、現実には打ち勝つ、そして物事の推移を変える手助けをしてくれるのではないか、新しい未来を作るために力を貸してくれるのではないか、そういう気持ちも込めて映画を見ているのだと私は思いますし、それが私の希望です。

*

*

*

本日お話ししたようなロシア映画界の最近の動きと現状について、私は昨年刊行した「Bad Russians（悪いロシア人たち）」という本に詳しく書きました。私はこの本を 1 年かけて書き上げました。これは、ここ 20 年間のプーチン政権において映画がどのような形でプロパガンダに利用されてきたかということを、多くの事実を挙げながら考察した本でもあります。現在はまだロシア語版だけしかありませんが、いつの日か日本語版も出版されることを私は期待しています。



＜質疑応答＞

—— ウクライナの戦争映画について、ヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督の「アトランティス」の名前が出ましたが、同監督の「リフレクション」はどう評価されますか？ また、この映画のプロデューサーもウクライナ戦争で兵士として前線に行っていると聞きましたが…。

ドーリン ご指摘の通り、この映画のプロデューサーと制作陣の何名かは前線に行っています。先ほど紹介したオレグ・センツォフ監督と同様です。ということで、ウクライナの映画界においても、病理的な状況というものが同時に存在しています。

映画「リフレクション」ですが、ヴァシヤノヴィチ監督は「アトランティス」を作った後に「リフレクション」を撮りましたが、私は「アトランティス」に比べると面白味が少ないと思いました。「アトランティス」に比べると「リフレクション」はより直線的な戦争映画になっていて、敵もまた複雑な人間であるということが見えなくなっています。しかしこれは戦争という状況下では当然だと思います。戦場において

は、敵は絶対悪だからです。ただ、同時にこの映画は、自分自身の感情や行動を分析する内容にはなっていて、ただ単にストレートな戦争映画ではありません。単純に直線的な戦争映画になっているのは最近のロシアの戦争映画です。

—— 昨年、「第 9 中隊」(DVD 等の邦題「アフガン」、劇場未公開、動画配信サイトで視聴可) という映画を見ました。ソ連時代のアフガニスタン戦争を描いた作品ですが、これはロシアのプロパガンダに沿った映画でしょうか？ ドーリンさんはどう見ておられますか？

ドーリン 「第 9 中隊」は 2005 年に作られた映画で、フォード・ボンダルチュク監督の初めての大作映画であり、プロデューサーのアレクサンドル・ロドニャンスキーにとっても大きな作品でした。ロシアの映画界におけるブレイクスルー的(突破口的)な作品です。「Bad Russians」という本で、私はこの作品のことも詳しく書きました。

私のこの映画に対する見方ですが、複雑な二つの考えが同時にあります。最初にこの映画を見た時、私はとても気に入りました。その理由の一つは、これはアメリカで制作されたベトナム戦争ものの映画のフォーマットを、きわめて巧みな形でソビエトおよびロシアの題材に適合させたものであると考えたからです。例えば「プラトーン」(オリバー・ストーン監督、1986 年)、あるいは「フルメタルジャケット」(スタンリー・キューブリック監督、1987 年)といった作品の構成や形に大変よく適合させた映画だなと感じました。

この「第 9 中隊」という映画は、国が発注をして作られたものではありません。当時のロシア国家は映画がこれだけの影響力を持つということを理解していなかったの、国が映画制作を発注するようなことはまだ行われていなかったのです。ですから、この映画は純然たる商業映画であり、そして非常に大きな商業的成功を収めました。

しかしながら、この作品はアフガニスタン戦争を映画制作陣がモデル化したものですが、アフガン戦争を題材としてどう扱うかというその姿勢は、現在の地点に立って見ると、非常に驚愕すべき預言的な要素を持っていると私は思います。どういうことか？ 登場人物たちは、ルサンチマン(怨念や憎悪)の塊であり、自分の行動を反芻したり、自分たちの責任を問い直したりすることを一切しない作品であるからです。ソビエトはいくつもの戦争を行ってきたわけですが、過去の戦争に対してそうした態度であったからこそ、今回のウクライナ侵攻というものが可能になったとも私は考えています。

——私は数か月前に、三島由紀夫が監督・主演した「憂国」という映画を見ました。1966 年の作品です。この映画でとても印象に残ったのは、切腹シーンを延々と撮っているところです。実際にこの映画を作って 4 年後に三島は割腹自殺を実行したわけです。映画「憂国」から私が見て取ったのは、戦

争にも、生きていくことにも、三島は幻滅しているということでした。ロシアで制作された映画で同じようなものはあるでしょうか？

ドーリン 現在の日本映画を含めた芸術が進んでいる動きは、三島の動きとは正反対のものだと私は思います。たとえば、「ゴジラー 1.0 (マイナスワン)」という映画ですが、これは自殺を英雄化するのとは真反対の映画です。また、宮崎駿の最新作「君たちはどう生きるか」(2023 年 7 月公開)を例として挙げることもできます。人の命、人間の価値というものは非常に尊いというのがこの作品の一貫したテーマです。

奇妙に感じられるかも知れませんが、ロシアの映画界にも「憂国」と同じような例として挙げることができる作品があります。昨年のカヌヌ映画祭にキリル・セブレネニコフ監督が英語で撮った最初の作品を出品しました。「リモーノフ」(英語名『Limonov: The Ballad』)という映画です。これは詩人であり政治家であった実在の人物エドワード・リモーノフ(1943-2020 年)の人生を描いた作品です。

セブレネニコフは、リモーノフを「ロシア版ジョーカー」、あるいは「ロシア版三島由紀夫」と公言してはばかりません。つまり、ゼスチャー(振る舞い)の美しさ、理念の美しさというものが、人の命よりもはるかに勝るという考え方。行動や理念をロマンチック化し、英雄化する、詩的なものの見方です。セブレネニコフによると、まさにそのようなものの見方、考え方というものが、現在のウクライナ侵攻という悲劇の根本にあると考えられます。

—— ロシアのインディペンデント映画とドキュメンタリー映画についてお聞きします。昨年日本で「グレース (Grace)」(イリヤ・ポヴォロツキー監督)という映画が公開されました。撮影機材の高性能化と小型化で、ロシア国内でもドキュメンタリー映画やインディペンデント映画がたくさん作られるようになっていないかと思います。現在の状況を教えてください。

ドーリン 現在のロシアにおいて、インディペンデント映画は大変リスクなものですが、自己資金あるいは投資家の資金で作家主義映画を撮る人はいます。しかし内容を見てみると、チェブラーシカよりもっと現実逃避的です。「この映画は、現実社会の真実を語る、誠実な映画である」と言いながら、最も重要な問題を回避する時、つまり検閲や戦争、暴力や抑圧というものを回避する場合、それはおとぎ話よりさらに現実逃避的になってしまうのです。

逆説的ですが、ブロックバスター映画で誠実に語る場合、例えば「巨匠とマルガリータ」ですけれども、インディペンデント映画で語るよりもむしろ語りやすいという状況が起きています。

というのは、ブロックバスター映画には、現実をストレ

トに映さない、迂回して曖昧な形で物事を語るというやり方が、そもそもジャンルとして存在しているからです。しかしそれが作家主義映画になると、そのようなやり方は単なる自己検閲、あるいは単に勇気が足りないことの証明になってしまいます。

映画「グレース」ですけれども、この作品も 2023 年のカンヌ映画祭に出品されて上演されたのですが、ロシアというものは観客の誰の関心も呼ぶことができませんでした。ロシアでは、今でも作家主義作品の制作が続けられていますが、その本数は年々減っています。その中でヒットしたものはほとんどありません。

——ドーリンさんはパパです。子供さんをお持ちです。私にも 6 歳の子供がいます。現在戦争が行われているわけで、だから私は子供を連れてロシアに帰ることができません。そのことを子供は理解しているとは思いますが、それと同時に、「人を殺すということは何でもない。この世にありふれたことだ」と、その 6 歳の子供が思っている現実があります。子供が読む本にも、テレビアニメやゲームでも、戦争や殺し合いごっこが溢れています。「戦争はいけない」「人を殺してはならない」ということを、どうやって子供に説明すればいいとお考えでしょうか？ これは今やロシアではやってくれない教育ですが、ドーリンさんの考えを聞かせてください。

ドーリン 素晴らしい質問をありがとうございます。一見すると、単純でナイーブな質問と思われるかもしれませんが、実のところ相当に難しい複雑な問いかけです。

人間の文化というものは、建設や創造とともに暴力や破壊からも成り立っています。暴力が英雄的な行為として賛美されることがしばしばあります。この文化を変えるのは相当に難しい。変えるには時間がかかると思います。もしかすると、未来には状況は変わるかもしれませんが。映画においても、その他の分野においても、女性が男性と同等の権利を持つ状況になれば変わるかも知れません。

私たち欧州の文化にとって、最初の作家はホメロスであり、最初の文学作品はイリアスです。これは戦争を賛美する作品であり、男性が男性のために書いた作品と言うこともできるかも知れません。日本の文学の土台となっているのは源氏物語です。つまり愛について語っている作品であり、暴力や死を賛美する作品とは全く異質のものです。しかしながら、日本という国が、後に残虐な帝国となり、多くの民族を抑圧し、暴力と残虐行為を英雄的な行為とみなす時代が訪れたことを、この源氏物語が阻止したわけでない。人類を改善することは、非常に難しい、困難なことです。

質問では、父親である私の体験についても触れられているので、こうお答えしたいと思います。

確かに子供は本も読み映画も見っていますが、しかしそういったことよりは、子供が実生活で直接目にしたり聞いたり

して体験することの方が、はるかに大きな力があると私は思います。お母さんであるあなた自身、そして子供の周囲にいる大人や家族たちが、実際に話すこと、実際に行動する内容こそが、(いわゆる文化というものよりは) 子供の人間としての土台になると私は信じています。

——私はつい先日、核戦争後の世界を描いたソ連の SF 映画「死者からの手紙」(コンスタンチン・ロプシヤンスキー監督 1986 年) を観ました。人を深く感動させるこういった作品が人間を変えることができないなんて、私には信じられないという思いがあります。しかし、現実には戦争が起きている。私たちの社会に存在する断絶、あるいは深い淵、そういうものに直面して私たちはどう行動すればいいのでしょうか。

ドーリン 私は、芸術作品というものが政治や人々の行動に与える影響について、それを過大評価したり、ロマンチック化しすぎたりしてはならないと思います。

では、芸術でなければ何が、私たちを自己破滅から救うのか。それはモラルであると思います。モラルというものは人それぞれの解釈がありますが、少なくとも文化よりはモラルの方が自己破滅から私たちを救う力は大きいと思います。なぜなら、文化の解釈は無限にあるからです。

しかし、芸術・文化というものが人間のモラル形成に役立ってきたことも事実であって、特に宗教が年々影響力を失ってきている状況では、この課題の解決には芸術の方がより多くの力を持っているのかも知れません。

——映画評論家として、今後ロシア映画とどのように向き合っていくのか、教えてください。

ドーリン 現在のロシア映画については、できる限り偏ることなく客観的に見ていきたいと思います。19 世紀のロシアの文芸評論家ヴィッサリオン・ベリンスキーは、「〇〇年のロシア文学概観」というものを毎年書いていました。

私は昨年、「2023 年のロシア映画界レビュー (概観)」という動画を公開しましたが、現在、「2024 年のロシア映画界レビュー」の準備を進めています。少なくとも一年に 1 回は、私がロシア映画をどう見たかを報告をすると同時に、その年の概観を人々に提示していく予定です。

※ **отчебурахнуть** ロシアの若者や兵士の間で使われ始めたスラングで、ロシア・ウクライナ戦争に関連して登場した新語。**чебурахнуть кого-то (по кому-то) / отчебурахнуть** — もともとは「倒す」「ぶっ飛ばす」「ひっくり返す」といった俗語的な意味合いを持つ言葉だったが、最近では軍事スラングとして「ミサイルや砲弾などで敵を攻撃する、壊滅させる」という意味で使われるようになっていく。語感的には「ドカンとやる」「ズドンとぶっ放す」に近い。チェブラーシカがこんな使われ方をするとはい、...。(了)

昨年 9 月から 6 か月間カザフ国立大学に留学した東北大学の冬木里佳さんと、ロシア語劇団コンツェルトでレールモン
トフの『人間と情熱』の公演（本年 2 月）に取り組んだ東京外国語大学の平原真宏さんから、それぞれ体験記を投稿して
いただきました。冬木さんの体験記は、最近増えてきたカザフスタンでの留学について、現地での生活が分かりやすく書
かれていて、これから留学を考えている人の参考になります。平原さんの報告記は、大学生活の中での体験が人生の大き
な糧になることを教えられる内容で、とても勇気づけられます。（編集部）

「カザフスタン留学体験記」

《投稿》

何気ない一場面が何か宝物のように思える

冬木 里佳（東北大学）

文書館からの帰り道、近くの学校に通う子どもたちに混じ
ってバスに揺られながら、荒野を覆う一面の雪景色と遠くの
山々に沈みゆく夕日をぼんやり眺めるのが好きだった。よく
通っていた文書館のある村を通るバス路線だと、都市部とは
異なり、車内で聞こえるのはだいたいカザフ語で、私に分か
るのは Paxmet（ありがとう）くらいしかない。私に合わせて
ロシア語で話してくれていたが、お世話になった方々の多
くが日常的に使うのはカザフ語だったので、カザフ語も勉強
しておけば良かったなあと思留学中はよく思ったものである。
とにもかくにも、何気ない一場面が何か宝物のように思えて
しまうほど、カザフスタン・アルマトイでの半年間の留學生
活は忘れがたいものとなった。



カザフ国立大学

【最初のテスト】

9 月初頭の授業初日、私と同じ時期にカザフ国立大学文献
学部（正確には、カザフ国立大学教育サービス「グロッサ」
多面的科学イノベーションセンター言語コース）での留学を
開始して、一緒にグループレッスンを受けるという学生が教
室に集められ、テストが行われた。難易度は A1 レベルで、
クラス分けを意図してというよりは個々の学習進度を測るテ
ストのようだった。しかしテストの結果、それぞれの学習進
度に大きな差があるということが判明し、相談のうえ個別レ
ッスンに変更されることになった。ただ、納めた授業料はあ
くまでグループレッスンの金額だったので、1 コマ 50 分週
12 コマを、本来同じ授業を受けるはずだった私たち学生 3
人で割り、1 人あたり週 4 コマを個人レッスンで、というこ
とになった。以来、他の学生とは廊下ですれ違う程度でほと
んど顔を合わせていない。留学をするにあたり友達ができる
かは重要な問題だが、私は留學生活の大半を 1 人で過ごした。

先生にも何度か心配されたが、博士論文のための史料調査を
兼ねて来ていたということもあり、とくに気にすることなく、
日々外国での新しい発見に胸を躍らせながら楽しく生きてい
た。

【授業】

私の場合、授業は 1 週間のうち文法 3 コマ、会話 1 コマで、
時間割は先生が他に受け持つ授業との兼ね合いなどでしばし
ば変更される。授業は英語やジェスチャーを交えつつ主にロ
シア語で行われたが、どの言語を使用するかは学生に応じて
変わるようで、隣の教室では英語で授業が進められていた。
文法の授業は、その日扱う事項について説明を受け、練習問
題を解き、間違えた箇所を解説してもらう、以上の繰り返し
で、その過程で発音などについても指導が入る。史料調査も
兼ねて留学している私は、基本的に宿題以外の自主学習をし
なかったため、練習問題中心の進め方は授業内でおおむね知

識を定着させることができるという点でありがたく、また対外国人ロシア語教育学を専門とする方による、学生個人の学習進度や個性を踏まえての解説は大いに理解の助けになった。会話の授業では、新聞記事をもとにした教材を使用し、現代社会の諸問題について先生とごく簡単な討論を行った。

【図書館】

「街に出て、カフェに行ったりして、生のロシア語を沢山聞いて」とは、顔を合わせて数回で私のインドな性格を見抜いた先生の言である。とはいえ毎度カフェに行くお金もないので、かわりによく利用したのが、アバイ通りにあるカザフスタン国立図書館だった。国立図書館には軽食堂やコーヒーの自動販売機、さらにはトイレトペーパー完備の無料トイレもあり、一日中快適に過ごすことができる。入口で手荷物検査を受けたあと、ゲートを通して左の登録カウンターで外国人も簡単に利用者登録が可能である。利用方法の詳細は図書館のウェブサイトを確認するか、図書館スタッフ（とても親切！）に尋ねるのが良い。私は週末、コーヒーを片手にここで 1 週間分の日記をまとめて書くのが密かな楽しみだった。

【生活】

11 月も下旬に差し掛かるころ、私は引っ越しを余儀なくされた。滞在先アパートの水漏れがひどくなり大家さんに相談したところ、全般的な改修工事が必要だということになったのである。もともと古いアパートで、私の入居前に室内の改装はされたが、配管等は古いままだった。放心状態で JIC の協力者の方に連絡をとると、大家さんとの交渉やアパート探しなどを助けてくださり、時期も幸いしてすぐに新しい部屋へ移ることができた。改めて、沢山の方に支えられて留学することが出来ているのだと実感した出来事である。食事については、体力的・時間的制約もあり自炊はほとんどせず、安い食堂、屋台、パン屋を探して通っていた。ちなみに、アパート関連で何か問題があった時、私はすぐに **WhatsApp** で大家さんに相談していた（トイレの流水が止まらない、シャワーが壊れた、ゴミ捨て場はどこですか...。なお、私の知る限り、アルマトイではゴミは所定のコンテナに分別不要で、いつでも出すことが可能である）。大家さんはどちらも親切な方で、問題にはすぐに対応してくださった。家賃や光熱費の支払い、カザフスタンではお馴染みカスピ銀行の送金サービスを利用していた。相手の電話番号が分かればアプリから簡単に送金できるので、家賃は毎月定額を、光熱費は大家さんから当月分の金額を知らされ、それぞれ大家さんの電話番号に送金、という形である。また、留学当初はどこで何が売られているのか分からず、とにかく通販カスピ・マガジンに世話になった。こちらでもカスピ銀行アプリから利用可能で、対応商品については最寄りのカスピ・ポストマートに届けても

らえる。最初のアパートにはレースカーテンしか取り付けられていなかったの、私は手始めにカーテンを購入した。



夜になるとライトアップされるカザフスタン国立図書館

【余暇】

予めマルチプルのビザでお願いしていたので、文書館や図書館が閉まる年末年始には隣国ウズベキスタンを旅行した。行きは飛行機、帰りは鉄道の約 1 週間の旅である。チケットの購入にはこれまたカスピ銀行アプリ内のカスピ・トラベルを利用した。なお、旅行などで一時的にカザフスタンを離れる際は、大学に申し出る必要があった。この手続きをしなければトラブルに巻き込まれる可能性があるということなので、旅行などでカザフスタンを離れる際は、担任の先生にその旨を伝えることをおすすめしたい。肝心の旅行の感想だが、（自分用の）お土産はこの思い出だけで良いなと思えるほど素敵な旅だった。

* * *

なんだかんだとトラブルも多かったが、その分逞しくもなった。ここに書いた諸々、書かなかった諸々を思い起こすたび、あらゆる感情の入り混じったものが記憶の中からにじみ出す。だが、その複雑さすらも愛おしい。アルマトイを去る夜の空港で、「ビザ、今日までじゃないか」と言われ、「残念ながらね」と思わず返してしまうくらいには、不安ばかりだった半年前とは打って変わり、この国を離れがたく思ってしまったのだった。（ふゆき・りか）



ロシア語劇団コンツェルト

《投稿》

学生演劇×ロシア語演劇で55年目

平原 真宏（東京外国語大学）

初めまして。私は東京外国語大学ロシア地域専攻に在籍し、ロシア語劇団コンツェルトにて第 54 回本公演の演出を担当しました平原真宏と申します。本公演は、2 月 7 日から 9 日まで上演され、今回も多くのご好評を頂きながら幕を下ろしました。まずは公演に関わってくださった全ての皆様に多大なる感謝を述べさせていただきます。このような時世ではありつつも、皆様のご協力を賜り、長年続いている劇団の事績に、無事 54 の数字が加えられたことに安堵しております。

ロシア語劇団コンツェルト

私たちの劇団は、早稲田大学と東京外国語大学の学生を中心に 20 名ほどで活動している学生劇団であり、また基本的に全編をロシア語で上演する外国語劇団でもあります。1971 年、当時の教員の呼びかけによって集まった学生たちの「学芸会」として始まった団体でしたが、今では演劇劇団として、各大学の大学祭・語劇祭などとは完全に独立して活動しており、公演主催・準備・上演に至るすべての活動を独自で行っています。このような「学生外国語劇団」は私の知る限り、私たちが日本で唯一の団体です。公演は毎年 2 回、早稲田大学構内にて行っており、特に冬に開催している本公演には、一般のロシア語学習者やロシア語ネイティブの方もいらっしゃり、毎年 100 名以上の方にお越しいただいております。

以前は演出を外部の方に協力していただくこともあったのですが、近年は学生が演出を行っています。そのため演目などに各年の演出の特色が現れ、多彩なものとなっています。昨年度及び本年度はそれぞれ演出本人が戯曲を全訳し上演するなど、挑戦的な試みも行っています。前述のとおり、その他演劇に必要な準備も多くを団員が行っています。照明・音響・衣装・字幕・舞台設置・広報活動...、夏に行う小規模の新人公演ではその全てを団員が行い、冬の本公演では一部機材の関係上外注で行うこともあります。ほぼすべての仕事のノウハウを劇団内で共有して、連綿と続いてきた団体です。学生のロシア語上達の場合、ロシア語を学習する学生たちの交流の場合、また多様な色をもつロシア文学・演劇に触れる場合として続いており、本年で 55 年度目を迎えます。皆様にも是非知っていただき、今後ともご注目いただければと思います。



第 54 回本公演『人間と情熱』(レールモントフ)の一場面

本公演戯曲について

先日上演した本公演の演目は、ミハイル・レールモントフの『人間と情熱』。昨年度上演のソログープ『賢い蜜蜂の贈り物』に続いて、本邦での上演は初めてとなる戯曲でした。この戯曲は、18 世紀前半の詩人であるレールモントフが、モスクワの寄宿学校在籍時代に、彼自身の周囲で起きた出来事をもとに書きあげた戯曲です。母方の祖母と父の対立、また血縁者との恋愛という苦悩に対する心の底からの叫びを、16 歳という青年期只中の彼が書き上げたものです。主人公であるユーリーは、レールモントフ自身をモデルとしており、母方の祖母と父が長年口論を重ね、自身は従妹に恋をしているという、まさに同じ設定のもとでストーリーが進行しています。作中に登場する幾つかのセリフには、当時彼が実際に見聞きした言葉も使われていると目されており、レールモントフを知る上でも重要な作品の 1 つと言われている。

また、レールモントフが寄宿学校在籍中に数多くの同時代の文学に触れていたことを示す資料ともなっています。この戯曲も、ドイツの詩人シラーの影響を受けた作品とされ、彼の処女戯曲『群盗』の構成に類似した点が多くみられます。今回演出を担当して感じたのは、戯曲執筆当時に連載されていたプーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』の色も強く感じるということです。主人公、友人、ヒロインとその姉妹、

という人物構成、その性格やそれぞれの恋模様などにも興味深い類似性を感じました。

私自身は、一昨年レールモントフという“戯曲家”に出会って以降、彼の作品について調べてきました。しかし、邦訳されて一般に流通した戯曲は『仮面舞踏会』の 1 作のみであり、その試みは難航しました。日本語以外の情報に当たるのは翻訳の時間がかかるため、何かしら目的化して取り組みたいという願望がありました。そこで本公演の場を借りることで、私自身もレールモントフを知ることができ、また多くの方が新たなレールモントフの戯曲に触れることができると考えて、この作品を選びました。

翻訳の苦労

翻訳には非常に苦労しました。まず一つ目に、私が文学や翻訳を専攻している人間ではないことがあります。翻訳と言えば、専ら大学の講義で行う講読用の勉強しかしておらず、根本的なノウハウの欠如があった中での翻訳作業でした。

また作者が 200 年ほど前の詩人であるため、現代ロシア語とは違う表現や、地域性を表す音の訛りのある表現がいくつもあったこと、さらに詩的な韻を含む表現も多く、単純に直訳できない表現が少なくありませんでした。さらに、上演時に字幕化することを考慮した翻訳が必要なことも踏まえ、観客にとって難解にならない平易な表現を使いながら翻訳することは、本当に難易度の高いものでした。夏休みを使って翻訳しましたが、200 時間以上は費やしました。

そんな中でも、レールモントフの研究者の方に翻訳の添削指導をしていただき、私の至らない翻訳をなんとかお見せできる形まで仕上げることができました。それだけでなく、他の団員の力も借りながら翻訳を完成させられたことは、公演の稽古の中でも何度も感じさせられました。

上演後に私の翻訳について、いくつか好意的な反響をいただいたことは大変嬉しかったです。

4 か月の稽古の中で

2 月の本公演の稽古は 10 月から始まります。毎年 3 割以上の学生が入れ替わるため、役者個々人の演劇経験が少なく、今年の場合、半数以上は役者経験が 1 回しかなく、長時間の演劇は初めてという人が多かったです。経験の少ない役者たちの演技・身体操作のバリエーションをいかに数多く引き出すかというのが、毎年演出担当が直面する悩みです。今年も同じ課題に直面しました。私は高校演劇から通算 4 年間役者として舞台に立っていたのですが、彼らのように「バリエーションがない」という時、どのように解決したのか記憶が少し臆気で、引き出し方の検討には本当に苦労しました。演出経験のある先輩などの助言も受け、解決に向かって動いたのはいい思い出です。

もう一つの苦労は、やはりそれぞれの学生生活との両立の問題です。台詞の暗記・自分の表現の検討など、演劇は稽古



練習と打ち合わせ

場以外、劇団活動外でも時間を割く必要があることが多く、同時にそれぞれが上演用の裏方作業を抱えていることもあり、団員には活動時間外にも数多くの負担があります。そんな中で、大学生活と劇団活動を両立することは団員各々が大変苦労したと思います。

また、外国語劇団特有のことなのですが、日本語字幕でどれだけの情報を伝えることが出来るかということが大きな課題としてのしかかっています。実は人間の知覚の限界のために、字幕は一度に 28 字しか表示できません。その中で、観客の方々にどのように伝えるか、切り捨てなければいけない情報を精査・取捨選択し、簡潔に反映する作業が必要になり



ます。日本語演劇では起こりえない、非常に重要な、難しい作業の 1 つです。字幕と演技の摺り合わせも必要です。台詞内でどこを、どのように強調するか、演技・発話の“間”に合わせた字幕の表示といった細かな工夫にもこだわって字幕制作を行っています。それだけ

でなく、今年はこの数年と比べて、意識的な表現を多用して字幕を作り、物語の進行から離れた細かな表現を字幕から外しました。観客にストーリーを確実に伝えることを重要視して字幕を制作したためです。こういった変更が柔軟に行われるのは、その仕事の担当者が頻繁に入れ替わる学生演劇ならではのことだと思います。

開催後のご報告

まずは、開催に際し多くの方からの差し入れやご支援を頂きましたこと、この場を借りて御礼を申し上げます。皆様からの多大なご支援によって、私たちの劇団は運営されているということを改めて実感すると共に、その期待に応えられるように団員一同、劇団活動に精進して参りたいと決意してお

ります。コロナ禍以降、劇団の運営にも大きな影が落ちていましたが、この2年でようやく復調の兆しを見せ、来年以降はその影響を振り払って歩める状態で、後輩たちに引き渡せることに嬉しく思っています。

公演後には多くの方から反響をいただきました。大変ありがたく思います。観劇後の皆様からの感想は、団員一同の大きな励みとなっています。観劇アンケートの一部をお守りとして写真で保存している団員もいるほどです。

私個人としても、アンケートだけでなく、ご覧になった方々の SNS 投稿などを拝見しました。今回の演劇のオペラ性に言及をされている方もいらっしゃいましたが、まさに主題としていた音楽をはじめ、演出にオペラの構造を参考にしているところもあります。演出担当の私が個人的に見に行くことが多く、同じ舞台芸術として取り入れてみようという試みでもありました。いかがでしたでしょうか。

多くの皆様のご意見・ご感想を反映して、来年度もさらに良い演劇を作り上げられるように努力して参ります。

感謝の辞

改めまして、この度のコンツェルトの本公演は団員の力だけでなく、オペレーションを行ってくださる外部の方、発音指導をしてくださる先生や留学生など大学関係者の方々、協賛だけでなくこのような寄稿の場を頂いたジェーアイシー旅行センター様をはじめとした協賛企業の皆様が助力をくださったことで初めて完成した演劇です。団員一同深く感謝しております。そして観劇にいらしてくださった方々へも、私たちの公演を知り、早稲田までわざわざ足を運んでくださったこと、感謝の念が絶えません。

最後に、拙稿をお読みになってこの度の公演に興味を持たれた方、もう一度ご覧になりたいという方へ、劇団からお知らせがございます。現在公演の映像公開の準備を行っております。おそらくこの記事の公開頃には、劇団公式 YouTube にて動画が公開されているかと思います。よろしければ是非ご覧ください。また、以前の公演もご覧になることができます。そちらもぜひご覧ください。

これを読んでロシア語劇団コンツェルトに興味を持った学生の方はぜひ稽古見学に来てください。一般の方は、次回本公演の観劇にいらっしゃることを楽しみにしております。

皆様に多大なご支援を頂きながらロシア語劇団コンツェルトの 54 年目が終わりました。来年からは OB となる身ではありますが、次の 1 年、さらに 5 年、10 年と多くの方から愛される劇団であることを願っております。

以下は、劇団公式サイト・SNS・YouTube のリンクです。フォローして新しい情報をお待ちください。

劇団公式サイト：<https://www.kontsert.jp/>

X (旧 Twitter)：<https://x.com/theatrekontsert>

Instagram：<https://www.instagram.com/theatrekontsert/>

YouTube：<https://www.youtube.com/@konntserutor>

《報告》JIC ロシア語サロン 春の伝統行事、冬のスポーツ… 毎回テーマを変えて十数回開催

JIC スタッフによる会話サロン「JIC ロシア語サロン」の活動についてご紹介します。

JIC ロシア語サロンはコロナ禍の 2021 年の 11 月に始めました。当初は JIC で輸入したロシア製シロップのスビテン (Сбитень) をロシア語で紹介し、ロシア語学習者に試してもらおうというのが始まりでした。第一回目はスビテンとは何か、スビテンを使ったお菓子のレシピなどをロシア語で紹介しました。スビテンは、独特のハーブの香りがして、お茶やヨーグルトに入れるとロシアを感じる味になります。大変好評で数回購入してくださった方もいました。その後、最初の輸入在庫が売り切れて、さらに追加輸入しようとしたところでウクライナ戦争がはじまり、制裁措置で輸入が困難になり、残念ながらスビテンは 1 回きりの輸入になってしまいました。

ロシアに対する風当たりは強くなりつつも、当時はまだコロナの影響で旅行に行けなくなり、人と会うのも憚られる時期だったので、オンライン上でロシア語を話してもらうことを目的にロシア語サロンを続けることにしました。現在も年に数回のペースで開催しています。講師は JIC のロシア人スタッフが担当し、レッスンは 1 回完結、毎回異なったテーマで会話のレッスンをします。参加者は JIC から送ったテキストを読み、事前にいくつかテーマに分けた質問をロシア語で答えられるように準備します。当日は講師が追加情報を話したり、受講生からの質問に答えたりしながら、話を膨らませます。参加定員は 10 人以内としています。最近は常時 4～6 人の参加者で開催しています。

ロシア語サロンのテーマは様々で、時期に合わせて事務局で設定したり、参加者の方からのリクエストで決めたりしています。今までのテーマをご紹介します。

- 「Китайский квартал」観光地の一例で横浜の中華街についてロシア語で読み、日本とロシアの地理や観光について話しました。
- 「Новый год и Рождество」ロシアの新年とクリスマスの歴史についてのテキストを読み、日本との違いを比べました。
- 「Зимние Олимпийские игры」冬季北京オリンピックの時期に、冬のスポーツや知っているロシアのスポーツ選手について話しました。
- 「Московский Кремль」モスクワのクレムリンの歴史や建築について知識を深めました。

- 「Весенние народные праздники на Руси, дошедшие до наших дней」ロシアの伝統的な春の行事がテーマでした。「Масленица」「Вербное воскресенье」「Пасха」「Красная горка」など、皆様はご存じですか？
- 「Русские: а что они едят?」ロシアで収穫できるキノコの種類やキノコを使った料理のレシピを紹介しました。
- 「Грузия」コーカサスを背景にしたプーシキンやレールモントフの詩の一部を読みました。
- 「Народные приметы и суеверия」ロシアに古くから伝わる迷信と日本の迷信の話をしました。
- 「Общественный транспорт Москвы」モスクワの地下鉄について。新しい駅や車両を写真とともに紹介しました。
- 「Мёд」ロシアでは多くの種類の蜂蜜が売られています。どの花の蜂蜜が美味しいか想像しながらのレッスンでした。お土産選びの参考になるかもしれません。
- 「Труппа, которая продолжает очаровывать мир」サロン開催日がイーゴリ・モイセーエフ生誕 118 周年記念日だったので、モイセーエフ民族バレエ団について紹介しました。
- 「Дача как часть русской культуры」ダーチャは、ロシアの夏には欠かせないものです。ダーチャの始まりから現在のダーチャになるまでの歴史を、講師が紹介しました。
- 「Российские автомобили」ソビエト時代からあるロシアの自動車メーカーについて。ロシアとの付き合いが長い方には懐かしく感じる車がたくさんありました。

直近のロシア語サロンは 2025 年 2 月、テーマは「ロシアの教育制度」でした。講師は JIC モスクワスタッフのイーラさん。日本とロシアの教育制度の違いを説明し、自身の学生時代の話などをしました。参加者はロシア語を始めたきっかけや、好きだった科目や苦手な科目、クラブ活動のことなどを思い出しながら話しました。

参加者からロシアでは子供のメンタル面のサポートをどうしているかと質問がありました。日本では不登校率は検索すればすぐ出てきますし、テレビのニュースや新聞で見かけることがあり、大きな問題になっています。

イーラさんに調べてもらったところ、ロシアでは不登校率の統計はすぐには出てきません。特別取り上げられるほどのことではないからかもしれませんが、イーラさんが小学生の子どものいる友人に聞いたところでは、学校に行っていない子どもがいるということはないそうです。ロシアでは 15 歳までの 9 年間は義務教育であり、正当な理由がなく欠席を繰り返すことがあるというのは考えにくいのです。不登校の子供が全くいないわけではないと思いますが、モスクワに関しては言えば、ロシアの中でも教育水準が高く、様々な制度も整っているの、不登校が深刻化する前に対応できているのかもしれない。それでも何らかの理由や問題のある子どもには自宅でのオンライン学習などのサポートがあるそうです。

高等教育制度に関しても日本との違いがあり、変化してい

ます。ソビエト時代、大学は学士課程、修士課程ではなく、通常は 5 年制の専門家課程（Специалитет）でした。2003 年ヨーロッパの高等教育の標準化を目指すボローニャ・プロセス加盟により、現在、ロシアは欧米や日本と同じ学士課程 4 年（Бакалавриат）と修士課程 2 年（Магистратура）の制度が設置されていますが、2022 年にボローニャ・プロセスからの脱退を発表し、来年 2026 年 9 月の入学から新しい制度が適用されることになりました。新しい制度は学士と専門家に相当する基礎高等教育 4～6 年（Базовое высшее образование）と修士に相当する専門高等教育 1～3 年（Специализированное высшее образование）になります。

今回のサロンでもイーラさんからモスクワの身近な様子や最近ロシアでニュースになったことなどを聞きながら、アットホームな雰囲気で開催しました。会話レベルは初中級～中級程度です。今まで参加していただいた方はロシア語学習歴が長い方が多く、ロシアとの縁の深い方も多くいらっしゃいました。レッスンでは参加者の皆さんがロシアに行った時の話、住んでいた時の話、好きな文学の話、ロシア料理の話など、いろいろな話題が出て、私たち JIC スタッフも楽しく聞かせていただいています。

今後いつかはモスクワで、オフラインのサロンを設定できる日が来れば良いなあと思っています。

(JIC・中林英子)

2025 年度 JIC ロシア語オンライン講座

＜JIC ロシア語講座の特徴＞

- ・先生はネイティブのロシア人（入門以外）
- ・7 名までの少人数クラス
- ・文法、会話、語彙、表現力をバランスよく鍛えます。

4 月 15 日から開講（前期 15 回／後期 15 回）

入門／火曜 19:00～20:30／やまがみ・ともこ

初級①／金曜 19:00～20:30／西森・スヴェトラナ

初級②／金曜 19:00～21:00／O・ガリーナ

中級①／水曜 19:00～20:30／O・ナタリア

中級②／火曜 19:00～20:30／B・スヴェトラナ

中級③(文法・会話)／木曜 19:00～20:30／O・ナタリア

中上級(会話・文法)／水曜 19:30～21:00／S・ポリーナ

中上級(購読・文法)／木曜 19:30～21:00／西森・スヴェトラナ

入門・初級(会話)／火曜 10:00～11:30／やまがみ・ともこ

受講費用: 前期 39000 円(15 回)、後期 39000 円(15 回)

始めて受講する人は入会金 5000 円。30 分間のレベルチェックでその人にあったクラスを案内します。

→ 詳しくは JIC のホームページで！

<https://www.jic-web.co.jp/cgi-bin/study/russian/>

主催: 国際親善交流センター(JIC)/大阪日口協会

<日ロ交流情報>

大阪日ロ協会が定期総会 (3 月 15 日) ウクライナ停戦交渉めぐり講演会



3 月 15 日、大阪日ロ協会（藤本和貴夫理事長）の第 46 期定期総会と講演会が、大阪市内の会議室で行われました。大阪日ロ協会は、コロナ禍とウクライナ戦争で多くの日ロ交流団体の活動が停滞する中でも、オンライン講演会を開くなどひとときわ活発に活動を続けてきましたが、今回はトランプ大統領の再登場で急速に動き出したウクライナ戦争停戦交渉を取り上げ、国際政治学者の東郷和彦氏を講師にとりタイムリーな講演会を行いました（本誌 2 頁に講演録掲載）。

日本・カザフ国際バレエ・フェスティバル (3 月 28 日) アーティストホームヴィレッジが栃木で開催



「第 1 回国際フェスティバル」と銘打って、日本とカザフスタンのバレエ教室の子供たちが共同で参加するバレエ・フェスティバルが 3 月 28 日に栃木市で開催されました。カザフスタンから 100 名以上が来日し、日頃の練習成果を披露すると同時に、日本側からも地元の高校生による和太鼓演奏や着物の着付けパフォーマンスが行われるなど、充実した文化交流イベントでした。主催したのは、栃木県壬生町でカザフスタンとのバレエ交流を長年続けてきたアーティストホームヴィレッジ（AHV／浦山宏子社長）。「ダンスで世界が一つになる」を合言葉に、これからも第 2 回、第 3 回とフェスティバルを開催したいと浦山さんは意欲満々です。

ロシア語映画発掘上映会

上映会、講演会、ダネリア監督特集… 今年も快進撃が止まらない

エース・スクエア（守屋愛さん）が主催するロシア語映画発掘上映会は、今年も快進撃を続けています。12 月 28 日「チャロディ〜魔法使いたち」（1982 年、ソ連・オデッサ映画スタジオ）、1 月 12 日「ユノナ号とアヴォシ号」（1983 年、ソ連）、そして 2 月 16 日には 13 回目となる「二人のヒョードル」（1958 年、ソ連）の上映会を開催。



さらに、ウクライナ戦争に反対し現在はロシア国外で活動している著名な映画評論家アントン・ドーリン氏の講演会（2 月 1 日、東京大学本郷キャンパス）を企画し、Morc 阿佐ヶ谷の「ゲオルギー・ダネリア監督特集」（3 月 28 日～4 月 10 日、「不思議惑星キン・ザ・ザ」など 6 作品を連続上映）にも協力するなど、次々とその活動範囲を広げています。

ロシア語映画発掘上映会の今後の予定は、エース・スクエアのホームページでご確認ください。

<https://sites.google.com/view/acesquare>

日ロ友好愛知の会が臨時総会 (4 月 5 日) 「あいちロシア協会」に名称変更

4 月 5 日、日ロ友好愛知の会の臨時総会が名古屋市内で開かれました。同会はこれまで一般社団法人日ロ友好愛知の会として活動してきましたが、今回、「あいちロシア協会」に名称を変更し、併せて一般社団法人を廃し、任意団体として活動を継続することになりました。



総会后、「ロシア民謡はなぜ日本人の心に響くのか」と題して、安原雅之・愛知県立芸術大学副学長が講演。「ともしび」

「カチューシャ」「黒い瞳」など、戦後日本で親しまれ歌い継がれてきたロシア民謡の数々を紹介しながら、これらの歌がどのように生まれ、なぜ日本人に愛されてきたのか、わかりやすく解説されました。日本人のロシア民謡好きを証明するかのように、参加者は 50 名を超え、大盛況の講演会となりました。

日ロ協会が観桜の宴 (4 月 7 日、鳩山会館) 創立 60 周年迎え、再起動を期す



4 月 7 日、東京文京区の鳩山会館にて、日本・ロシア協会の創立 60 周年記念「観桜の宴」が開催されました。高村正彦会長、西村康稔理事長をはじめ茨城、栃木、愛知など各地の日ロ協会の代表やゲスト約 60 名が参集。満開の桜を愛でると同時に、米トランプ政権の下で進み始めたウクライナ停戦協議の動きを受けて、日ロ関係を再び前に動かしていこうと、久しぶりに賑やかに歓談しました。

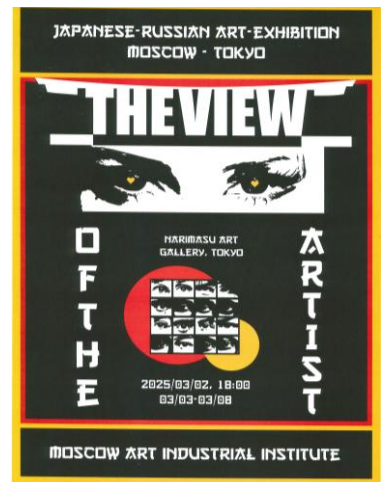
ゲストには上月豊久・前駐ロシア日本大使（現、千葉工業大学特別教授）や、相澤一郎・日ロ友好議員連盟会長らも参加し、それぞれ日ロ交流拡大の必要性を強調しました。挨拶に立った上月氏は、米露交渉がプーチン大統領のペースで進んでいることを指摘しつつ、「プーチンは、軍の動員力、ロシア経済の動向、戦争の被害などを含めて国民の反応を見ている。どこかでまとめるつもりなのだろうが、どのタイミングでそうなるか、交渉の進展を見守りたい」と話しました。

1965 年に前身となる日ソ親善協会が設立されて以来、日ロ協会は今年で 60 周年を迎えます。コロナ禍とウクライナ戦争の影響で、長らく「開店休業」状態にあった活動が、これを機に再度活性化することが期待されます。



モスクワ芸術工科大学の学生グループが来日 板橋区成増で「日露美術展」(3 月)

3 月 1 日から 9 日まで、モスクワ芸術工科大学 (MHPI) の学生・卒業生のグループ 40 名が来日し、板橋区成増のアートギャラリーで作品展を開催しました。展示されたのは学生たちが日本について調べて感じ取った日本イメージを作品に表現したもので、若いロシア人の感性が描くユニークな「日本」が並びました。引率者である同大学のシャフィコワ教授と親交のある彫刻家・指田竹房さんが日程をアレンジして、一行は都内や青梅市、奈良市などの美術館を巡り、併せて早春の日本観光を楽しみました。



美術展のポスター

また、3 月 3 日には東京新宿の文化学園大学を訪問、キャンパス見学をするとともに、今後の交流などについて話していました。今回の訪問は 22 年 10 月、24 年 3 月に次ぐ 3 回目で、シャフィコワ教授は「将来、もっと多くの日本の芸術大学と交流できるように、訪問を続けたい」と話していました。



3 月 3 日、新宿の文化学園大学を訪問した一行

第 11 回

こんな時代にロシア語のすすめ

「こんなところでドイツ語のすすめ」

黒田 龍之助

4 月です。外国語を始める季節ですね。この春はロシア語を学んでみませんか。

.....というような話題は、今年も止めておくことにします。ロシア語をめぐる状況は 1 年経ってもまったく変わりません。相変わらず人気がない。その理由は、外国語を始める人の多くが旅行したいからかもしれません。国際情勢を考えれば、ロシアへは旅行ができないと信じている日本人が圧倒的。旅行社である JIC もつらいわけです。

大学生の場合は多くが実学志向、つまり役に立つ外国語を求めるので、ロシア語はどうしても不利になります。将来使えて、簡単で、ついでに愛される言語を選びがちなのは仕方ないでしょう。

そこで発想を変えます。選択必修の第 2 外国語ではなく、第 3 外国語を目指すのはどうでしょうか。たくさんの外国語を学びたいという意欲のある学生にアピールして、ロシア語を学ぼうよと声をかけるのです。わたしが教える大学のロシア語のクラスは、そういう学生がほとんど。ただしそんなふうに考えてくれるのは 1 年生ではなく、ふつう 2 年生以上。大学生活が 1 年以上経過して、余裕ができた頃に 3 番目の外国語を学んでくれるのも、決して悪くはありません。さらには 4 番目、5 番目の外国語を学んでも、学費は同額です。

わたしの第 3 外国語は、大学 2 年生のときに選んだドイツ語でした。そのときの話は『寄り道ふらふら外国語』（白水社）に書きましたので、ここではくり返しません。週 1 回 1 年間の授業で初級文法をひと通り詰め込まれて大変でした。当然ながら話せるレベルには到達しなかったのですが、実をいえば後の人生でときどき役に立ちました。しかもソ連やロシアでの話です。

ソ連時代はいろいろと物不足だった話はずいぶん耳にしましたが、それは食料品や生活用品に限らなかったようです。旅行者にとって困ったのは、市内地図が売られていないこと。いや、ないことはないのです。ただそれがロシア語でも英語でもなく、ホテル内の売店や街の新聞スタンドに残っているのは、なぜかドイツ語版でした。ドイツ人は旅行好きだとの噂もありますが、ソ連はドイツ人訪問客を上回る数の地図を作ってしまったのでしょうか。

かつて旅行したときに買い求めた市内地図は、今でも大切に保存しているのですが、探してみればタリン、リガ、オデ

Intourist empfiehlt folgende Besichtigungsfahrten für Reisegruppen und Individualreisende:

- **Stadtführer** (Dauer: 2 bis 3 Stunden).
- **nach Jarmala**, dem Kurort an der Küste der Riger Bucht (20 km von Riga entfernt).
- **nach Sigulda**, dem landschaftlich schönen Gebiet Lettlands, im Nationalpark „Gaiziņi“ gelegen (50 km von Riga entfernt).
- **in die Hauptstadt Sverdlovsk – Tallin** – durch die landschaftlich reizvollen Gebiete Saualoti, Ainali, Perzoni (90 km von Riga entfernt).
- **Gruppensitzung auf dem Fluss Daugava** und in der Riger Bucht mit dem Tragflügelboot „Rakete“.
- **in das Lettische Ethnographische Freilichtmuseum**, einem der Museen der Sowjetunion.
- **nach Opre**, dem Kurort am Ufer der Flüsse Daugava und Opre (18 km von Riga entfernt).
- **zur Mahls- und Gedenkstätte für die Opfer des faschistischen Terror in Nakagala** (17 km von Riga entfernt).



(写真)ラトビアの首都リガの市内地図にあったインツォーリスト旅行社の広告(ドイツ語版)

ッサはドイツ語版でした。眺めていると当時の苦労を思い出します。Museum だったら、英語から類推がつかます。でも Geschichte は、ええと、そうだ、「歴史」だった、授業中にやったな。だから歴史博物館に違いない。でも Denkmalなんてはじめて見る単語。でも Lenin-Denkmal ということは、きっと記念碑じゃないか。こんな感じで頭を捻ったものです。

バルト諸国はドイツ語がとくに多かった気がします。

1990 年代はじめに JIC の通訳としてその一つに行ったのですが、同じホテルに泊まっていた外国人団体は、お互いの間でドイツ語を話していました。夕食のとき、このグループと一度だけいっしょになったことがあります。ほとんど同じところに食事を始めたのに、わたしたちのほうが少ないだけ先にコースが進み、こちらがお茶を飲んでいるところに、あちらのグループはデザートとなりました。頼んだコースが違っていたので、わたしたちのデザートはケーキだったのですが、ドイツ人団体のほうはアイスクリーム。わたしたちのグループにはアイスクリームが大好きな女性がいて、彼らに運ばれるデザートを思わずうっとり眺めていたらしい。すると年配のドイツ人男性が席を立ちあがり、自分のアイスクリームをその女性に運んできたのです！

わたしたちはビックリしたのですが、その方は満面の笑みで「いやいや、わたしはもう歳で食べられませんので」。もらった女性は大喜びでアイスクリームを食べています。それを眺めていた別の日本人女性に、今度はドイツ人女性がアイスクリームを運んできました。気がついたらわたしたちのグループは、女性も男性もみんなドイツ人グループからアイスクリームをいただいてしまったのです。よっぽど物欲しげな顔をしていたのでしょうか。いま思い出しても恥ずかしい。

お礼も兼ねて、わたしはこのグループに英語で話しかけました。観光旅行ですか。それに対して最初にアイスクリームを運んだ男性が「まあ、センチメンタルジャーニーといったところでしょうか」。わたしが理解できずにいると、相手は静かに、

「わたしたちは昔、この町に住んでいたのです」

第二次世界大戦後に国境が変わり、ドイツ系住民の一部は

移住を余儀なくされました。長いこと戻ることのできなかった懐かしい故郷が、ソ連崩壊によって再び訪問することが可能になったのでしょう。詳しい話を聴きたかったのですが、相手はロシア語がダメ、英語もそれほど得意ではなかったようで、それ以上は無理でした。わたしはなけなしのドイツ語で、ごめんなさい、わたしはドイツ語が話せないんですという、「いえいえ、あなたのドイツ語はお上手ですよ」と、にっこりお世辞をいってくれました。

このときはバルト諸国がソ連内でも例外的な地域なのだと考えていました。しかしそうでもなかったのです。

あるとき、これも JIC から派遣されて、日本とロシアの大学生が交流するプログラムで通訳をすることがありました。モスクワの大学を訪れ、日本人もロシア人も母語ではなく外国語を使い、お互いにディスカッションするのです。教室に案内されると、こちらを待ちうけていたロシア側のリーダーがこういいました。

「学生は英語を話すグループと、ドイツ語を話すグループがあります」

つまり日本の大学生は自分の得意な外国語を選べというわけですが、当然ながら日本側は全員が英語、ドイツ語ができる者なんてひとりもいません。そこでドイツ語のできるロシア人学生数名のお相手は、わたしがしました。わたしだって当時は大学院生だったから、学生交流に参加してもおかしくはありません。ただしドイツ語ではなくてロシア語です。

わたしは学生たちに質問しました。どうして英語じゃなくて、ドイツ語を選んだのですか？その答えはさまざまで、バルト諸国のようにドイツ語話者がいる地域が出身だからという学生もいましたが、それ以外にも、ソ連と仲のよかった東ドイツ（ドイツ民主共和国）との交流がきっかけとか、外国語を習い始めるとき自分の学校にはドイツ語しかなかったというような人もいました。ドイツ語をはじめめる理由は、みんなそれぞれだったんですね。彼らの話を聞いているうちに、ドイツ語で話してみたい気もしましたが、残念ながらそれはやっぱり無理でした。

ふり返ってみれば、ソ連・ロシアではドイツ語と出合うことがときどきありました。ロシア語や英語ができればコミュニケーションとしては問題ないのですが、それでもドイツ語が少し分かるだけでなかなか面白かったですし、もっと知りたいれば興味深い話が聞けたことでしょう。

このインフォメーションの読者でしたら、英語はもちろん、ロシア語にもすでに触れていらっしゃる方が多いことでしょう。ではこの 4 月は新たにドイツ語を学んで、ソ連・ロシアに新しい目を向けるというのはどうでしょうか。新しい外国語をはじめるのは、いつだって楽しいものです。

そしてついながら、ドイツ語が得意な方は新たにロシア語にも触れていただければ幸いです。

JICのロシア語留学・研修

35 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていたが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学 9 月生・募集中



オンライン
相談 受付中!

期間：2025年9月1日より10ヶ月

締切：2025年6月13日

モスクワ国立大学 1,250,000 円(授業料 10 ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,039,000 円(授業料 10 ヶ月)

ゲルツェン教育大学 998,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 480,000 円(授業料 10 ヶ月)

シンスク国立言語大学 422,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金
および取得手数料などがかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

◆◆編集後記◆◆

▼本号は、いきなり長大な講演録 2 本から始めました。どちらも重要な内容です。「トランプ停戦交渉」を外交の専門家はどうか。ウクライナ戦争に反対してロシアから追われた映画評論家は、戦争下のロシア映画産業とロシア社会の変容をどう分析しているか。教えられることが多々あります。▼いよいよ日ロ関係、日ロ交流を再起動する時です。停戦交渉の行方を見守りながら、私たちは今できることをやり続ける決意です。JIC は旅行・留学・文化交流の分野での日ロ交流拡大に取り組みます。読者の皆さんからの反応、声かけが大きな力です。よろしく願いいたします。(F)